

NAJIMA

NAjia=Asia

編集後記
なじまあ
— Accessible Asia —

『なじまあ』第11号をお届けします。未曾有のパンデミックでまだ混乱が収まっていませんが、なんとか今年度の『なじまあ』を刊行することができました。日夜研究室に常駐していた私も大学へは月に数度来ただけになり、大学での授業・研究のスタイルも大きく変容しつつあります。そのような世情を反映して、今回の特集は「フィールドワークのこれから」というテーマにしました。今後、アジアをめぐる学術環境がどのような状況に落ち着くのか、まだまだ見通しは不透明です。そのようななかで、考古学や歴史学を中心に思うところを語ってもらいました。このような状況であればこそ、一旦立ち止まって、フィールドワークとはどのような意味があるのか、そして、歴史学と考古学がどのように連携してゆくべきか考え直してみる機会がもしもありません。ただ、フィールドワークといえば、やはり文化人類学や地理学を無視できないでしょう。今回の特集にそれらの分野の執筆者は入っていません。フィールドワークの比重が大きい分野では、コロナ禍はより深刻な問題を引き起こしていることでしょうか。それだけに「フィールドワークのこれから」をどのようにしてゆくべきか、模索されていることと思います。というわけで、特集「フィールドワークのこれから」は他分野における続編の企画も目下進行中です。

コロナ禍の影響で、私は現在、電車通勤をしていません。自宅から

約8kmの道のりを自転車で約50分かけて通勤します。しかし、これが結構楽しく、途中には石神井川沿いの風光明媚な風景や私の研究に関わる史跡が点在しています。例えば、立教大学池袋キャンパスのある豊島区の由来となった豊島氏の拠点があったのは北区でした。豊島氏は12世紀に紀伊権守・紀伊国三上荘の地頭職に就いていて、豊島荘は熊野三山に寄進された神領荘園だったと言われています。そのため、北区・荒川区には王子神社など熊野・紀伊系神社が多く、千住が河川水運による木材流通の集積地であったのも無関係ではありません。石神井川の別名、音無川や飛鳥山の飛鳥明神も熊野に由来するもので、江戸時代まで熊野巡礼を模した参拝が盛んでした。歌川広重の『江戸名所百景』を見ると、当時の石神井川には「王子の大滝」があったというから、驚きです。現在とは異なる過去の景観を思いはせながら走るのも、自転車通勤の醍醐味です。ちなみに、立教大学のすぐそばにある谷端川南緑道。一見ただの遊歩道ですが、雨乞いの伝承が残る豊島区要町の粟島神社弁天池を水源のひとつとして石神井川の南を蛇行していた谷端川が暗渠化したものです。弁才天というと、インドの河神サラスヴァティー、水神ナーガ(大蛇) = 宇賀神や中国の龍王信仰につながってゆくのですが…。切りがないのでこの辺で。(四日市康博)

なじまあ
— Accessible Asia —



特集
フィールドワークのこれから
歴史学・考古学編

世界のおじさん・おばさん ⑩

700年前にイブン=バットウータが訪れたペルシャ湾の港町アーバーターン。彼はその町の地主だ。近年新たに発見された700年前のアーバーターン旧市街遺跡。さっそく調査に出向いたところ、土地の所有者である彼も同行してくれた。地表には中国の陶磁片が散布している。彼も興味津々だ。調査が終わって、彼は所有するナツメヤシ園に我々を案内した後、自宅でもてなしてくれた。いかにも豪勢で優雅そうな邸宅であったが、ナツメヤシ園では木の幹を指さして彼が言った。「見てごらん、穴がたくさん空いているだろう。銃弾の跡だよ。」多くの人が苦しみ、亡くなったイラン・イラク戦争。現在の彼もその苦境を乗り越えた末にある。(四日市康博)



なじまあ - Accessible Asia - 11号

●発行/2021年3月31日 ●編集/立教大学アジア地域研究所 四日市康博 野中健一
●制作/たまさや ●デザイン/犬山ハリコ ●印刷/株式会社シュービ ●ISSN 2188-8213



立教大学アジア地域研究所 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel・Fax: 03-3985-2581 E-mail: ajiken@rikkyo.ac.jp https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/caas/

「陶磁の道」をさらにたどる—山東地域に注目/徳留大輔
感染症と国家安全維持法のもとでの香港歴史博物館/松岡昌和
歴史学におけるフィールドワーク—これまでとこれから/四日市康博

旦匡子 樋口謙一郎 高橋孝治 上田信 橋本栄莉 王媛 倉田徹
フランツィスカ・シュルツ 深串徹 清水邦彦 清水美里 四日市康博

11
No.11 2021

なじまあ

親しみ深きアジア

— Accessible Asia —

No.11 2021 contents 11

特集／フィールドワークのこれから～歴史学・考古学編

「陶磁の道」をさらにたどる—山東地域に注目／徳留大輔	4
感染症と国家安全維持法もとの香港歴史博物館／松岡昌和	6
歴史学におけるフィールドワーク—これまでとこれから／四日市康博	8
コラム	
アジア映画—日本公開の変遷／且匡子	10
論考	
対外言語普及と「現地主義」アプローチ／樋口謙一郎	11
中朝国境の法社会学—パク・ヨンミ『生きるための選択』に描かれた脱北者の中国での経験を素材に、高橋孝治『中国社会の法社会学』の補論として／高橋孝治	13
海域学コレクション	
上海はなぜ開港されたのか／上田信	16
教壇から	
コロナとフィールドワークことはじめ／橋本栄莉	18
中国語「で」中国文化を学ぶ・考える／王媛	19
アジ研の本棚-Book review-	
『人口の中国史—先史時代から19世紀まで』／倉田徹	20
『尖閣諸島をめぐる「誤解」を解く』／フランツィスカ・シュルツ	21
研究員紹介	
台湾における日本認識／深串徹	22
路傍の地蔵像と江戸城石垣—西武池袋線椎名町駅前の地蔵像から考える／清水邦彦	23
フィールドから	
デング熱流行のなかで見学した台湾の土木遺跡／清水美里	24
アジ研的・レストラン探訪	
タイレストラン ムートーン／四日市康博	27
編集後記／四日市康博	28
世界のおじさん・おばさん／四日市康博	28

●「なじまあ」とは
身近なアジア、親しみあるアジア、行きやすいアジア。「親しみ深い」というコンセプトを一言でいうと「なじみ」。「アジアになじむ」という意味をこめて、日本語で「なじまあ」というタイトルを思いつきました。NAJIMIにASIAをかけています。「～まあ」のいい方で「アジアになじもうよ」という勧誘の意も表しています。

表紙写真／石羊にまたがる子供たち／イラン・タブリーズにあるアゼルバイジャン博物館には州内からモンゴル期以降の石獣や墓碑が多数集められている。イランはイスラム圏であるにもかかわらず、ペルシア帝国以来の伝統やトルコ・モンゴル支配の影響で石獣が多く製作された。
右ページ写真／(上段左)北京・国家博物館 水下考古成果展(2012年)／山東省三道崗で無数の鉄絵磁器(磁州窯)を積んだ元代の沈船遺跡が発見され、山東の陶磁器流通が注目されるきっかけとなった。(上段右)台湾澎湖諸島、後寮威靈宮の魘魘石敢當／アジアでも最大級の魔除け(石敢當)とされる。小さな石獅子も一緒。パンデミックに御利益は?(下段)香港歴史博物館(2014年正月)／天后廟や祠壇、ジャンク船、各神像、醒獅(獅子舞)など香港の伝統的な精神世界が再現されているホール。 撮影(すべて):四日市康博



特集
フィールドワークのこれから
歴史学・考古学編

「陶磁の道」をさらにたどる —山東地域に注目

文・写真／徳留大輔

とくどめ・だいすけ／出光美術館主任学芸員
2006年九州大学大学院比較社会学院博士後期課程単位取得退学、博士(比較社会文化)。山口県立萩美術館・浦上記念館主任学芸員を経て、2015年より出光美術館学芸員、2019年より現職。専門は中国考古学・東洋陶磁史。著書に『貿易陶磁器と東アジアの物流：平泉・博多・中国』(共編著、高志書院、2019年)、『中国陶磁史』(共訳、葉詰民著、出川哲朗監修、科学出版社・国書刊行会、2019年)など。



写真1/
右二片：エジプトフスタート遺跡出土中国青磁。左二片：それを流通していたときに模倣したエジプト産と思われる青軸陶器(出光美術館所蔵・展示)

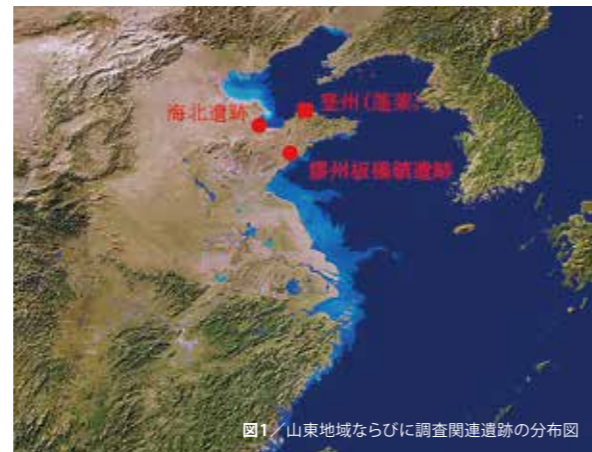


図1 山東地域ならびに調査関連遺跡の分布図

私は東洋陶磁・工芸分野を担当する学芸員として美術館に勤務している。「美術館の陶磁器担当の学芸員」と耳にすると、読者の方の中には「綺麗」「壊れていない完全な姿・形」の美しい陶磁器を展示・研究しているとお思いになる方も少なくないかもしれない。私が勤務する東京・丸の内に出光美術館にはもちろん様々な造形性や意匠・デザインが美しい陶磁器作品も数多く所蔵されているが、陶片(陶磁器のかげら)資料も多く所蔵している。例えば日本、中国、朝鮮半島の各地の窯で焼成された、また福岡の博多、大宰府、鎌倉の材木座などの都市や港湾遺跡などで出土・採集した陶片資料である。その一部は陶片資料を専門に展示する陶片展示室にて、公開している(写真1)。そのため当館の陶磁器を扱う学芸員は陶磁器の破片も活用した研究・展示活動も行ってきて、さて、私は自身の研究テーマの一つとし

て陶磁器の「流通」「受容」とその「背景」に着目している。完形品が出土・発見されれば、得られる情報は多くもつとも適しているが、出土する陶磁器は古い時代に使用・廃棄された結果として、今日発見されるので、残念ながら多くの陶磁器は破片である。私が近年主なフィールドの一つとしている中国山東省での出土事例も同様である。
山東省は渤海湾、東シナ海を臨む地域であり、現在は黄河の下流域にもなっている(図1)。いまから約4,000～5,000年前には日本の歴史の教科書でも紹介されるほど著名な卵殻黒陶に代表される新石器時代の山東龍山文化が形成された地域として知られ、また儒教の礎を築いた孔子の故郷ともいわれる魯の都・曲阜が所在している地でもある。
山東の地は中国陶磁史の流れでみると、先述した卵殻黒陶は器壁わずか数ミリ

の薄さという精巧さと美しさからよく知られてきたが、それ以外ではあまり注目されてこなかった。北朝時代以降、淄博窯において陶磁器生産が行われていることに着目し、最近では地域の産業や旅行客誘致などが展開されている。しかし、淄博窯は華北地域の一大民窯として著名な磁州窯系の窯場の一つであり、その製品は圧倒的によくが地元の山東地域で流通・消費されていた。そのため中国国内で広く流通していたというわけではなく、ましてや国外への大量の輸出ということあまり考えられない。ではなぜ山東地域に注目するのか。個人的なことを言えばかつて山東大学に留学したことや、以前勤務していた山口県が山東省と姉妹都市で、頻りに文物交流展を開催していたこともあり、自身のアカデミックネットワークが充実していることがある。しかし最大の理由は、山東は海に面している、東北アジアの交流史を考える上で非常



写真2 登州の海岸から渤海湾をのぞむ



写真4 壘利遺跡の調査の様子(共同研究者の徐波さん提供)

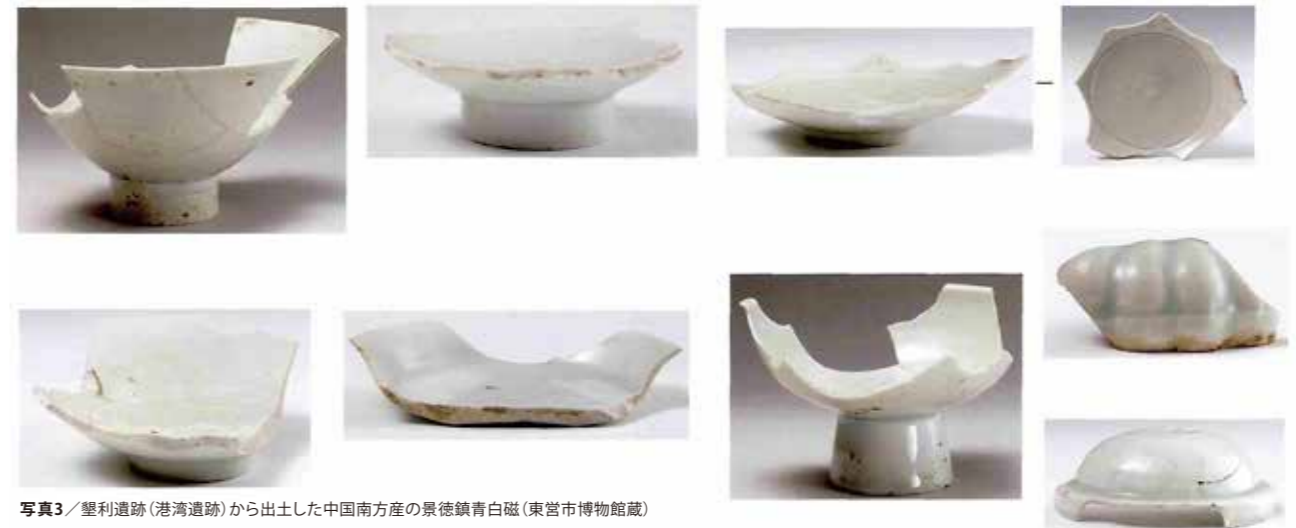


写真3 壘利遺跡(港湾遺跡)から出土した中国南方産の景德鎮青白磁(東営市博物館蔵)

に重要な地域であるからである。青島ビールで有名な青島が所在する山東半島から海を隔てた向こう側には遼東半島、朝鮮半島を臨む。山東半島の北側には登州があり、ここは奈良時代、遣唐使が入唐する際のルートとして知られている(写真2)。また高麗との交易においても重要な拠点であったし、山東半島の膠州板橋鎮の地には宋代に市舶司が設置されていた。また近年渤海湾岸の壘利河北遺跡といった港の遺跡なども発掘調査が行われ、この地域の海を介した南北交易ルートを考える上でも重要な遺跡・資料が増えている(写真3・4)。また唐時代以降、中原と江南を結ぶ水路も発達し、その路線にある山東の内陸地域には中国南方産の陶磁器が流通するようになった。この特徴こそ私が近年この山東の地をフィールドの中心の一つとしている理由である。つまり地元産の陶磁器の生産が行われていながら

も、例えば越窯青磁、景德鎮窯系青白磁、龍泉窯系青磁、また一部で福建産とおぼしき粗製の白磁といった南方産の陶磁器も流通・消費されていたことにある。南方産の陶磁器が、いつ、どのように流通・使用されていたのか、地元産の陶磁器との関係はどのようなものであったかを考察することが可能なのである。
私と共同研究者の山東博物館の徐波さんが研究をはじめた2015年以前は、特に宋元明時代の陶磁器研究はほとんど注目されていなかった。しかしこれまで行われてきた発掘調査の結果を丹念に調べ、実際の出土陶磁器資料を調査すると、南方産の陶磁器が出土・採集されていたことを徐々に明らかにすることができ、精緻な景德鎮窯青白磁、例えば11世紀代の北宋の中期頃から晩期にかけてどうも官吏や文人といった階層の人たちにより、受容

されてきたといった方がよいのかもしれない)。また海岸沿いの港湾遺跡では精緻なものだけでなく、日本の博多や平安京、平泉などでも見られる、南方産の粗製の白磁も数は少ないが確認することができた。このことは中国国内における陶磁器の流通のルートや交易のあり方と日本における中国陶磁の流通の在り方を比較する上でも重要な比較検討対象のケーススタディにもなると考えている。現在、新型コロナウイルスの問題もあり、現地調査は一旦休憩中。ただ、この間は中国版SNS(We Chat)を利用して、頻りにメールや電話会議などを通して研究情報を共有しながら、この研究は継続中。感染症の問題が落ち着いたら、いち早く現地での調査を再開したい。
これまで陶磁史研究ではあまり注目されてこなかった山東地域であるが、ぜひ注目していただきたい。

感染症と国家安全維持法のもとでの香港歴史博物館

文・写真／松岡昌和

まつおか・まさかず／立教大学兼任講師、立教大学アジア地域研究所特任研究員
立教大学文学部史学科卒業後、一橋大学大学院言語社会研究科で博士(学術)取得。日本学術振興会特別研究員を経て、現職。専門は東南アジア史、文化交流史。共著に『Japanese Language and Soft Power in Asia (Palgrave)』、『歴史学者と読む高校世界史』(勁草書房)、『香港の過去・現在・未来』(勉誠出版)など。



写真1／アヘン戦争関連の展示。南京条約や北京条約が収められているケースは大砲に囲まれている。「武力によって強制された条約」ということを示す演出がなされているものと見られる。

戦争の記憶や現代史に関心をもつ筆者にとって、博物館はさまざまな情報を提供してくれる研究のフィールドである。その国やその地域でどのような歴史像を提示しようとしているのかを、展示を通じて知ることができるだけでなく、そこを訪れる人びとの行動や眼差しを観察することで、人びとの歴史に対する意識を垣間見ることが出来る。筆者はもともとシンガポールを研究のフィールドとし、主に日本占領期についての調査を行ってきた。シンガポールでは、国立博物館や旧フォード工場の展示室「日本占領を生き抜いて：戦争とその遺産 (Surviving the Japanese Occupation: War and Its Legacies)」が日本占領期を扱っており、その展示についても関心を寄せてきた。2017年に開館した後者については、当初の名称「昭南ギャラリー (Syonan Gallery)」が市民の批判にさら

され、まもなく現在の名称に変更され、リー・シェンロン首相もそれについてコメントするまでの事態になった。そこに、シンガポールの人びとの戦争の記憶をとらえることができる。筆者は、こうした関心の延長で、近年香港歴史博物館 (Hong Kong Museum of History) にも関心を持つようになった。それがコロナウイルス感染症流行のさなか、2020年10月19日をもって常設展「香港故事 (The Hong Kong Story)」がリニューアルのため2年にわたって閉鎖されることになった。
1998年に九龍半島尖沙咀のチャタム・ロード南へと移転した香港歴史博物館の中心は、2001年にオープンした常設展の「香港故事」である。7000㎡を占める「香港故事」では、自然生態環境から、先史時代の香港、漢代から清代までの香港、香港の民俗、アヘン戦争と香港の割譲(写真

1)、香港の開港と発展、日本占領期(写真2)、そして現代都市と香港返還までが展示されている。これについての考察は、長年調査している韓国の中国研究者柳泳夏によってすでになされている(柳泳夏『香港弱体化：以香港歴史博物館の叙事为中心』圓桌文化、2018年)。筆者は、2019年8月に現地のライターおよび歴史研究者とともに「香港故事」を訪問する機会に恵まれた。本展示は、すでに中国中心である点などの問題が指摘されているが、展示数などは限られるものの、イギリス植民地下での発展や、1989年の百万人デモ(写真3)などの政治運動についても言及している。なお、訪問時には、特別展として、中華人民共和国建国70周年を記念する特別展が開かれていた(写真4)。
筆者は2020年3月に再訪し、展示についての追加の調査を行うことを計画してい

(上) 写真2／日本占領期に関する展示。日本の軍事進攻のほか、日本占領下での日本語教育や武力抵抗についての展示がある。武力抵抗については共産党系の動きが強調されている。

(中) 写真3／1989年の北京での学生運動を支援する百万人デモについての写真と解説。北京での学生運動については説明しているが、6月4日の天安門事件については触れられていない。



た。しかし、コロナウイルス感染症流行の影響で博物館は閉鎖し、また、筆者の香港出張自体がキャンセルとなった。数カ月して博物館は再開するが、10月になると一時閉鎖が明らかになった。新聞報道によると、その発表後、感染症流行にもかかわらず、多くの市民が博物館に足を運んだという。10月11日～17日までで17800人超、閉鎖前日の18日(日)には9800人超が訪問している(「香港故事展閉鎖 今逾9800人次入场 市民拍照存档：重開會對比變成點」『明報』2020年10月18日)。また、訪問者が香港総督歴や最後の総督クリス・パットン、一国二制度にかかわる展示をカメラに収めている姿も伝えられている。

香港では、同年6月30日に香港国家安全維持法が公布・施行されている。これは国家分裂や政権転覆などはかる行為や活動を取り締まるもので、香港独立を掲げる主張が違法行為とされるほか、学校教育など日常の場面においても言論・表現の自由に大きな制約が課されることになった。同時に、コロナウイルス感染症の流行により、集会が制限されており、大規模なデモなどによって市民が意思を示すことが難しくなっている。そのようななかにあつて、多くの市民が「香港故事」を訪れ、植民地の歴史と一国二制度にかかわる展示を熱心に撮影する、という行為は、デモへの参加とは異なった形での政治的な意思の表明と言えよう。そこからは、中央政府の影響下にある香港政府の手による展示のリニューアルに対する強い不安や、自分たちの歴史を保持していこうとする意識がうかがい知ることができる。



写真4／2019年8月の訪問時に開催されていた中華人民共和国建国70周年を記念する特別展。中国の現代化における香港の役割については言及されていない。

冒頭に紹介したシンガポールの旧フォード工場展示室の一件のように、リニューアル後の常設展について、設置者たる政府と市民との間にコミュニケーションの回路が確保されるかどうかはわからない。国家安全維持法によって直接的に政治的主張を行うことが避けられているが、一方で

市民の歴史への眼差しやそれにかかわる行動によって、人びとの意識を垣間見ることが可能である。リニューアル後の常設展に対して、市民がどのような反応を示すのか、それを観察していくことは、香港市民のアイデンティティを探っていくひとつの手段となるだろう。

歴史学におけるフィールドワーク これまでとこれから

文・写真／四日市康博

よっかいち・やすひろ／立教大学文学部史学科准教授・アジア地域研究所所長
2004年早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、博士(文学)。九州大学人文科学研究科専任講師を経て2018年より現職。専門はユーラシア交流史・海域アジア交流史。著書『モノから見た海域アジア史：モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流』(編著、九州大学出版会)など。

歴史的フィールドワーク事始め

私の研究テーマはモンゴル帝国・元朝時代の東西ユーラシア・海域世界の交流史である。歴史学のフィールドは当然、史料の中であり、ともかく史料を正確に読んで的確に理解することが本分であるわけだが、意外に野外での調査も重きを占めている。私が現地調査に出たきっかけは「にんぶろ」(寧波プロジェクト)と称される特定領域研究(代表：小島毅氏)や通称「倭寇の会」という自称若手の海域史研究会であった。そこでは様々な分野のメンバーと共に中国や国内で海域史関連の現地調査をおこなったが、この時得られた経験

と交流がその後のフィールドワークに生かされることになった。

私の調査は、主に交流史の観点から交易・流通に関わる港湾・都市空間を対象とする。まず、文献・考古資料から当の都市空間や交通網をできる限り再現し、現地でひたすら踏査するのである。地方誌や古地図から得られる橋や寺観の情報は大きな手掛かりとなる。特に都市化が急激に進んだ1980年代直前の地図には、現存しない宋元代創建の寺観を多く確認できる。一方、史跡や地名には検証不能な要素も多く、歴史学よりもフォークロアの領域に入ることも多い。だが、それを読み解くことも現地調査の醍醐味であるとも言える。

杭州でのフィールドワーク

例えば、清代の豪商、故雪岩の豪邸が残る杭州市内の望江路南の路地「元宝街」には元代の富蔵庫があったとされる。南海貿易を管理した行泉府司の財庫で、海外貿易品が貯蔵されていたという(地図1)。調べてみると、明代の『成化杭州府志』に「元省府の富蔵庫、朝天門の外に在り」とある。朝天門とは現在の鼓楼であり、元宝街はまさにその外側に位置する。だが、それだけである。同時代史料に情報は無いし、考古学的にも実証できない。しかし、この伝承はあながち間違いではないと考えている。都市空間的にここに富蔵庫が立地してもおかしくないからである。元宝街の横を通る塩橋河(現在の中河)は



地図1／元代杭州復元図(著者作成)

東に分岐し、保安水門から城外に通じていた。そこには「抽分廩」という地名が残っている。元代には行泉府司下屬の市舶司や税務司が置かれていたと見られる。「抽分」とは船貨(海外貿易品)に課す関税である。実際、この周辺を踏査すると、宋元代を含む各種陶磁片の多量散布を確認できた(写真1)。さらに、元宝街の東側は杭州城の望江門に直結し、北東には地方政府である江浙行省が置かれていた。つまり、水陸路共に貿易品の流通・貯蔵にも行政通達にも絶好の立地なのである。このように、現地を実際に歩いて得た情報と文献史料の組み合わせは貴重な示唆を与えてくれる。

狛犬とライオン

中国での調査経験は、他の地域での調査にも生かされた。近年は、従来の研究対象に加えて、動物図像の東西ユーラシア伝播も調査している。日本では「狛犬」と呼ばれる石獅子は中国から渡ってきたが、モンゴル高原を経由する陸路のほか、海路からもナーガ(蛇/龍)やマカラ(海獣)の形態に変化して西方から伝播した(写真2)。その起源は古代ペルシア～オリエントまで遡り、巻毛紋様から伝播の過程を



(左)写真3／(上段左)イタリア・パルマの大聖堂にある石獅子／(同右)モテナの大聖堂にある石獅子／(下段左)クロアチア・スプリット旧市街の大聖堂にある石獅子。もとはローマ皇帝ディオクレティアス聖廟だった／(同中央)シベク旧市街・聖ヤコブ教会の石獅子／(同右)北パレスティナのテル・ハツォル遺跡にあった紀元前15-13世紀の石獅子(イスラエル国立博物館)
(右)写真4／ロシア・ウラディーミルの聖ドミトリエフスキー聖堂の西壁ファサードに刻された巻毛紋のある獅子。巻毛のあるグリフィンや鳥も見られる



(左)写真2／(上段左)タイ・チェンマイのワット・チェディー＝ルアン・ナーガ／(同右)インドネシア・ジャワ島チャンディ＝キダルの海獣マカラ像／(中段左)ベトナムに残る12世紀チャンパの獅子(ストゥ)像／(同右)13世紀チャンパのマカラ像。奥のマカラは口からナーガが出る(以上2点ビンティン州博物館)／(下段左)ミーソン遺跡群の獅子／(同中央)マム塔出土の逆立ち獅子。逆立ちは名古屋城のシャチホコ(マカラ)で有名な水魚のポーズと同じで、獅子と海獣の共通性をうかがわせる／(同右)ベトナム・チャン＝ロー塔出土の獅子(以上2点ダナン・チャンパ彫刻美術館)
(右)写真5／(上段)マルコ＝ポーロも伝える盧溝橋の石獅子／(下段左・同中央)北京の大都遺跡から出土した元代石獅子。元代は都民の邸宅門前にも石獅子が置かれるようになった(北京石刻博物館)／(同中央)中国・開封市の龍亭にある宋皇城の午門前にあったと伝えられる石獅子／(同右)奈良・東大寺南大門にある12世紀の宋代石獅子

追うことができる。石獅子は地中海世界でも見られ、クロアチアやイタリアでは対の石獅子を確認できたが、いずれも巻毛紋は見られなかった(写真3)。しかし、ロシア・ウラディーミルの聖ドミトリエフスキー聖堂では巻毛紋を持つ獅子の石刻を発見できた(写真4)。12世紀ロマネスク様式の石刻はビザンツなどの影響も指摘されており、その伝来の解明にはなお道遠い。この巻毛紋様、日本には江戸時代／清代に入ってきたとされるが、実は平安～鎌倉期の狛犬にも巻毛を確認できる。この時期の中国風獅子を「宋風狛犬」と呼

ぶが、「渡来僧の世紀」と称される14世紀の元代まで断続的に石獅子が日本に入ってきていたと見られる(写真5)。

コロナ禍下でのフィールドワーク

しかしながら、昨今のコロナ禍で海外調査がいつ再開できるのか見通しはつかない。当分は国内調査を優先することになりそうだが、国内移動も制限されてしまったらどうするのか。不幸中の幸いというか、自宅と大学を結ぶ荒川区・北区・豊島区の周辺には豊島氏や葛西氏所縁の史跡が残っている。中には「水の武士団」として

の要素を残すものもあり、葛飾区の葛西城跡からは元代青花瓷器も出土している。これもまた、ユーラシア交流と関連する研究対象となる。もうひとつ、注目しているものに絵画資料がある。13～15世紀の絵画には洋の東西を問わず、龍・鳳凰・獅子・亀などアジア的な動物意匠が見られる。それは当時の衣装や織物の姿をそのまま反映したものと言われる。また、絵画には陶磁器など調度品も数多く描かれている。当面は、地元密着型のフィールドワークに並行して、絵画の世界の中でフィールドワークをおこなってゆくことにしたい。



写真1／(上段)杭州市元宝街／(下段左)抽分廩に散布する中国陶磁片／(同右)抽分廩。現在はマンションが建っていて、立ち入りできない(いずれも2008年)

アジア映画 日本公開の変遷

文・写真／旦 匡子

だん・きょうこ／神戸生まれ

80年代から関西でアジア映画の紹介を始め、配給、宣伝、企画上映、各国映画祭のアジア映画コンサルタントなどを手がける。国立民族学博物館にて“みんなくワールドシネマ”をコーディネートし、世界中の映画を識者の解説付きで上映している。

「パラサイト」！2020年のアカデミー賞授賞式で作品賞が発表された途端、続々と友人から喜びのメッセージが届いた。韓国映画のアカデミー賞受賞という快挙に感慨にふけりながら、1988年のソウルオリンピックの年、韓国映画を22年ぶりに日本劇場公開した無謀な仕事を思い出した。あの時、多くの人に問われた。「韓国に映画があるの？」

70年代、「燃えよドラゴン」をきっかけにブルース・リー・ブームが炸裂し、中学の男子たちはリーに成り切って教室で暴れていた。80年代中頃、中国・韓国・台湾・香港などの映画界でニューウェイブが起り、私自身が若い世代の新しい映像表現に感動と刺激を受け、アジアの映画を西洋や日本映画と肩を並べて映画館で公開したいと願った。

8～90年代は発展途上にあったアジアの国々は、マスコミでは政治や社会問題がとりざたされ、日本では少し暗さを感じさせるちょっと遠い存在だった。その後、各国が経済成長を遂げ、近いアジアへ気楽に旅する日本人も増え、親近感がぐっと増した。さらに、「冬のソナタ」でベ・ヨンジュンのような男優が登場すると、一夜にして韓国のイメージは一新、多くの女性がテレビドラマのロケ地を訪れようと渡韓した。数年前、イランの下町人情喜劇映画「ママのお客」を上映した時、多くの観客は泣いて笑って「イランってこんなに明るい国だったの？」「吉本でっか？」と驚き喜んでくれた。結果的に、情報量が少なく偏ったアジアのイメージの打破に、映像が大きな役割を果たすようになったのだ。

日本でインド映画というと、昔はサタジット・レイ監督の芸術映画、98年以降は「ムトゥ 踊るマハラジャ」のブームで歌あり踊りありの大娯楽映画。ビジネスの難しさや“どれも同じ”のレッテルが貼られて後が続き、再び脚光を浴びたのは、全世界公開から4年後の13年に日本公開された「きっと、うまくいく」だった。「歌って踊るだけではなかったのね」と今でも始終言われているが、ようやく多様なインド映画が理解され始めた。

現在に至るまで多くの素晴らしい映画が誕生し、国際的にも評価され、アジアの映画は映画館で堂々と公開されるようになった。ただ、「本当の一人前」に落ち着くにはもう少し時間がかかりそうだ。映画はその国の人々の暮らしや心情をリアルに映像で見せ、観客はそれをダイレクトに受け入れる。だから延々と「百聞は一見にしかず、見てね」と唱え続けていくしかない。



(左)写真1 / 1988年、22年ぶりの韓国映画劇場公開時に来阪した韓国の国民俳優アン・ソングさん
(右)写真2 / 1989年、今はなくなった大阪の梅田コマ・ゴールドとコマ・シルバーにて、偶然、中国映画が並んで公開



対外言語普及と「現地主義」アプローチ

文／樋口謙一郎

1. はじめに

本稿では、筆者が研究代表を務める科研課題「対外言語普及の新たな焦点と『現地主義』アプローチ」(課題番号20H01293)の概要を紹介する。¹⁾

筆者はこれまで、ほかの科研課題の調査や、勤務校の海外留学・研修関連の業務のなかで(さらには一種の趣味として)、各国の対外言語普及機関を訪問し、それらの取り組みを観察してきた。

そのなかで、多くの対外言語普及機関には「本国」の広報的意図が感じられる一方、長く相手国の人々の一般的、文化的関心に寄り添い続けるのは難しいという印象を得た(例えば東京のBritish Councilにはかつて一般向け図書館や英国料理レストランが併設されていたが、すでに廃止されている)。対外言語普及には、何よりも「現地」の応答性が大事なのではないか——これが本研究の感覚的な萌芽であった。

2. 対外言語普及研究の従来の視角

対外言語普及(諸国家が自国言語を海外に普及させようとする施策)は、歴史的に見れば、フランスのAlliance Francaise(1883年設立)、英国のBritish Council(1934年設立)、ドイツのGoethe-Institut(1951年設立)など、欧州諸国の使用言語の世界的拡大が中心であった。

これに関する従来の学術的論議は、主に応用言語学分野においてなされてきた。

その第1の例として、Robert Phillipsonに代表される「言語帝国主義」の議論が挙げられる。この議論では、言語支配、特に英語と他言語との間の構造的・文化的不平等の確立と連続的再構成による英語支配の主張・維持に対する批判がなされ(Phillipson 1992:47)、British Councilはモノリンガル型の英語教育の世界的浸透のための英国の戦略と位置づけられる。

第2の例として、対外言語普及を各国の

「文化外交」(Public Diplomacy)と位置づける視点がある。この視点では、関係諸国・地域間の文化的プレゼンスや信頼醸成、経済的波及性、それらの文脈における政策立案の過程・歴史が考察の対象とされてきた。

3. 新たな焦点：中国語と韓国語の事例

だが今日、上記のアプローチではカバーしきれない新たな事象もみられる。

その1つの事例は、中国政府が2004年に開設し、世界各地で急速にその勢力を拡大している「孔子学院」をめぐる議論である。孔子学院は、海外の大学などの教育機関と提携し、中国語や中国文化の教育・宣伝を行う機関であり、2020年3月現在、世界各国・地域に541校、日本にも17大学に設置されている。孔子学院はその特徴として、▽中国教育部が管轄する国家漢語国際推广領導小組弁公室(漢弁)の下部機構である、▽現地の大学組織の中に一部局(たとえば別科や専修科)のような組織形態で設置され、かつ教学の運用は、設置先の大学などからほぼ独立した自治形態を保持する、▽漢弁が開設資金や年間の助成金・運営費のほか、条件次第で中国人教師の給与・手当も(場合によっては施設建造費も)支払う——というように、中国政府が実質的に関与していることが挙げられる。だが、この特徴ゆえに「設置先の教育機関の学問の自由が阻害される」「孔子学院は中国共産党政府の宣伝組織だ」といった主張がなされることもあり、これは近年、特に米国を中心に、中国の「シャープパワー」として批判の対象となっている。

もう1つの事例は、韓国の「世宗学堂」である。これは韓国文化体育観光部所管の言語教育機関であり、2007年以降、各国に開設されるようになったものである。

韓国語の対外普及には次のような特徴がある。

第1に、従来、現地在住の韓国人・「同胞」のための民族教育としての韓国語教育の基

盤が、各国・地域に存在したという点である。世宗学堂の設置以前にも、「韓国教育院」(教育部所管)、「ハングル学校」(外交部所管)が各国にあり、それぞれ民族教育や母語理解教育などを行ってきた。

第2に、先述の文化外交としての対外言語普及が「言語の普及による文化理解の促進」だとすれば、韓国語の海外普及は、交通・情報通信手段の発達により文化伝播が急速に進み、韓国の映画やポピュラー音楽などがすでに各地で人気を博しているところに開始されたものである。つまり、British Council(英語)やAlliance Francaise(フランス語)などの事例では、しばしば「本国」の<学術や芸術といったハイカルチャーが言語学習に併行ないし追従する>のに対し、韓国語の場合、<大衆文化の浸透が言語普及に先行して現地で進んでいる>ことが多い。

このように、中国語、韓国語の事象は、従来のアプローチでは説明しきれない。従来のアプローチは、言語帝国主義論にせよ、文化外交論にせよ、①ある国の対外言語普及の歴史的経緯や政策的意図、それらに盛り込まれた支配イデオロギーや広報戦略に焦点を当てており、いわば対外言語普及をめぐる「本国」の問題を中心に据えてきた、②「本国」から見たときの対外言語普及活動の「成果」や「影響力」に注目が集中しがちで、「現地」に元々備わる教育基盤、学習者の文化的嗜好や対外認識、普及言語と現地語との親和性などへの注目が希薄になりがちだった——という面がある。

4. 「現地主義」アプローチとは何か

「現地主義」には確たる定義があるわけではない。とはいえ、例えば、日本貿易振興機構アジア経済研究所(JETRO-IDE)の基本精神である「三現主義」(現地語、現地資料、現地調査)は、研究手法における「現地主義」として理解しやすいだろう。本研究においては「現地主義」アプローチを、ひとまず「『本国」

の言語普及の働きかけ以前に『現地』に元々備わる当該言語の教育基盤、学習者の文化的嗜好、対外認識、普及言語と現地語との親和性などに注目し、当該言語の普及の成否ならびに度合いを『現地』の文脈で理解、解釈する取り組み」と位置づける。

例えば、孔子学院の拡大に対する「現地」の受容／反発である。北米の研究者らが、権威主義国家による世論操作や対外工作活動などによる自国利益の拡大戦略を「シャープパワー」と呼び、その典型の一つに孔子学院を挙げていることは「現地主義」アプローチによって扱われるべきだろう。

一方、韓国語の対外普及活動は、上述の通り、在外韓国人の民族教育として各国・地域で行われていた。それらの教育機関が、「非・韓国人」に開放された語学教育機関としての世宗学堂の進出によりいかなる変化を遂げているのか、特に、主に韓国大衆文化への嗜好を契機とした「非・韓国人」の韓国語学習者の存在が、従来の民族教育としての韓国語教育とどのような関係を構築するのかが興味深い。

5. 結びにかえて：日本語教育の事例と小説「異郷のかたすみ」

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、本研究は思うように進んでいない（特に海外出張に厳しい制約が生じている）。本稿執筆時点（2020年11月）では中間成果の報告もままならないので、代わりに本研究の「ひろがり」について、やや脱線気味になるが、述べてみたい。

一つは、日本語の対外普及についてである。国際交流基金が3年ごとに行っている「海外日本語教育機関調査」によれば、2018年時点で日本語教育は世界142の国・地域で実施されており、日本語教育機関数、教師数、学習者数のいずれも増加している。（国際交流基金2018：9）

しかし、このようなデータはそれ自体、「本国」のためのものであり、「現地主義」で重視されるのは別の側面である。

例えば、市嶋典子らによって紹介されたシリアの日本語教育事情である。シリアでは2002年9月、国立ダマスカス大学に日本語学科が開設された。かつていた日本人教員も

退避し、シリア人教師だけで授業を続けることになった。

そのような状況に置かれたシリアの日本語学習者にインタビューを行った市嶋（2016、2017）は、学習者が過酷な紛争下においても日本語学習を自分の「希望」と位置づけていたことなどを挙げ、国策としての日本語普及とは別次元の「パーソナルかつグローバルな日本語の意味づけ」に注目する。

また春日（2013）は、ある学習者が好んでそらじみた万葉集の歌「韓衣（からころも）裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来のや母なしにして）（服のすそに取りすがって泣く子どもたちを、防人（さきもり）として出征するため置いてきてしまった。あの子たちに母親はいないのに）」について、「私には、この歌はシリア人の心を詠んだように思えます。私の心と同じです」ということばを紹介している。ここには「本国」の目線では見えてこない、「現地」特有の言語学習観がある。

もう一つは、筆者が学生のところに読んだある小説のことである。最後にスピノフ的ではあるが、この研究テーマの着想に影響した話として触れさせていたがたい。

その小説とは、英国の作家フランシス・キングの「異郷のかたすみ」（A Corner of a Foreign Field）である。英国の著名な日本研究者で『源氏物語』を英訳したアーサー・ウェイリーをモデルに書かれたが、小説では日本人英文学者「黒田教授」に改められている。

「黒田教授」は、英文学に精通し、英国留学の希望を持っていると言いつながら決して英国には行こうとしない。そこにBritish Councilのディレクターである「私」が、「黒田教授」に幾度も英国留学のチャンスを提供するのだが、「黒田教授」はその都度、あれこれ理由を立てて自らその機会を潰してしまう。「私」にその理由を問いつめられた「黒田教授」は、このように告白する。

「私のイギリスはジェーン・オースティンのイギリス、そしてワーズワースやジョージ・エリオットやトマス・ハーディの生きたイギリスです。〔…〕なんなら、マーク・ラザフォードの、と申してもいい。私は、私は自分のイギリスを失いたくないんです。こんな風に考えるのは馬鹿げますか。」（King1964：85）²⁾

「黒田教授」は、英国に留学することで「自

分のイギリス」という理想が壊れることを恐れた。すなわち、「黒田教授」にとっての英国とは物質的なものでなく、精神あるいはアイデンティティにかかわるものだったといえる。

対外言語普及は国家の政策として実施される。「現地主義」アプローチは、その政策が「現地」でいかに受けとめられ、「本国」はそこからいかなる気づきを得るかという問いを突き付ける。シリアの日本語学習者の事例、「黒田教授のイギリス（アーサー・ウェイリーの日本）」は、われわれに、これからの対外言語普及のありかたを考えさせる。

折角の科研も、コロナ禍で中間成果まで紹介できず残念だが、この間の辛抱と引き換えに、研究計画を常に見直し、構想の「ひろがり」においてできることを模索していきたい。

- 1) 韓国語普及に関する事柄は、別の論稿で若干述べたことがある。（Higuchi 2017）それに踏まえて本稿では、韓国の事例を改めて概括し、中国語と日本語の事例を加えて述べる。
- 2) 原文を参照した上で、本稿では、池田雅之監修、横島昇訳（1991）『日本の雨傘』河合出版、323-324頁の訳文を引用した。

<参考文献>

市嶋典子（2016）「シリアの日本語教師・学習者の市民性形成過程についての一考察」『秋田大学国際交流センター紀要』5、1-20頁。
 ——（2017）「内戦、国家、日本語：シリアの日本語学習者の語りから」『現代思想』45（18）、236-245頁。
 春日芳晃（2013）「砲撃下の日本語授業 大学に着弾、15人犠牲 シリア内戦」『朝日新聞』2013年12月5日付。
 国際交流基金（2018）『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より』
<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>
 Higuchi, Ken'ichiro (2017) Overseas Language Diffusion and the "Localist Approach": Based upon the Case of the Korean Language, 『椋山女学園大学文化情報学部紀要』17、121-126頁。
 King, Francis (1964) *The Japanese Umbrella*, London: Longmans.
 Phillipson, Robert (1992) *Linguistic Imperialism*, Oxford University Press.

樋口謙一郎（ひぐち けんいちろう）

アジア地域研究所特任研究員・椋山女学園大学文化情報学部教授
 早稲田大学大学院社会科学部研究科博士後期課程満期退学。専門は朝鮮半島を中心とした東アジア地域研究、言語政策。著書に『米軍政期南朝鮮における言語・文字改革』（金壽堂出版、2009年）など。

中朝国境の法社会学

パク・ヨンミ『生きるための選択』に描かれた脱北者の中国での経験を素材に、高橋孝治『中国社会の法社会学』の補論として

文・写真／高橋孝治

1. 本稿の意義と位置付け

筆者は、2019年12月に『中国社会の法社会学——「無秩序」の奥にある法則の探求』（明石書店）という書籍を出版した（以下「本書」という）。本書は、中華人民共和国（以下「中国」という）の社会で起きている（起こった）様々な現象を法的に評価するものである。そして、その第3部は「ルポルタージュの中の中国と法」という題となっている。中国では報道規制などが敷かれており、報道されているニュースなどだけでは中国で起きている全ての現象を把握することは困難である。このような通常では報道されていないけれども中国で起きている現象を知りたい場合にはルポルタージュなどが非常に役に立つと言える（和田仁孝＝太田勝造[ほか] 2004：p.7でも、法社会学においてルポルタージュを素材とする有用性について言及されている）。すなわち、中国に関するルポルタージュを素材に事実確認を行って中国社会を検討したのが本章第3部であった。しかし、ここには問題もある。ルポルタージュは真実を伝えることを目的としているが、新聞報道や研究書に比べるとその度合いが落ちるということである。しかし、本書第3部では、素材として採用したルポルタージュに書かれていることが当該事件の全てであり、他の事実は一切存在しないと「仮定」して議論を進めた。それは、当該ルポルタージュ以外では報道されていない「真実」を調査することはできないし、他の情報が存在していない事件を素材にするという点から、当該ルポルタージュの内容のみを「真実」として議論を進めても、研究の意義は失われまいと考えたからである。その結果、本書第3部には2章分の「ルポルタージュの中の中国と法」に関する論考を掲載するに至った。

しかし、それであっても本書第3部に掲

載することが難しいと判断して、結果して「お蔵入り」となった内容が存在した。それは、パク・ヨンミ（満園真木（訳））（2015）『生きるための選択——少女は13歳のとき、脱北することを決意して川を渡った』（辰巳出版、以下「パク書」という）に描かれた、中国と朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」という）の国境（中朝国境）で自国での生活環境に耐えかねて北朝鮮から逃亡した者（以下「脱北者」という）。また、北朝鮮から逃亡する行為を「脱北」という）の中国での経験を元にした法的分析である。いわゆる脱北者は、中国の政府機関に発見されると北朝鮮に送還されてしまう。そのため、中朝国境では脱北者が隠れるように生活しながら中国をさらに脱出する機会を探しているものの、その弱みに付け込み、脱北者が中国人に奴隷のように扱われたり、性的搾取がなされているという話はよく聞く。しかし、この状況を学術的に検討した先行研究はほとんど存在せず、この周辺問題について触れたものも管見の限り宮宜叫（姜孝白）（2009）くらいしか存在しないように思える。このような実態研究の穴を埋めるという意味で「パク書に描かれた脱北者の中国での経験」の章は意義のある内容となるはずであった。しかし、この筆者であるパク・ヨンミがこれまでに答えたインタビューの全てを総合するとかなりの矛盾点があると指摘されており、パク・ヨンミの発言には虚偽があるのではないかと疑義も呈されている（写真2参照）。このような疑義が呈されると、パク書もその内容に疑義が生じ、研究の素材にはできないと判断し、本書に「パク書に描かれた脱北者の中国での経験」を盛り込むことを中止したという経緯がある。しかし、前述の通り、中朝国境での脱北者の境遇に関する研究というのは皆無に等しいことから、あ

くまで「パク書に描かれた」という留保が強調され、その内容を「真実」として取り扱ってよいかには注意を要するものの、ここに本書の補論として公刊することとした。

2. パク書の概要と

そこに描かれた中国での脱北者

パク書は、脱北者であるパク・ヨンミの北朝鮮での生活、なぜ脱北を決意したのか、どのように脱北をしたのか、脱北の後、中国を経由して大韓民国（以下「韓国」という）へ行き、脱北者として情報発信を行うまでが書かれた自伝の形式をとっている。パク書は、第一部の北朝鮮、第二部の中国、第三部の韓国の三部からなっている。本稿で特に注目するのは、「第二部 中国」（パク書pp.155～240）である。

残念ながらパク書ではパク・ヨンミとその母親の脱北がメインとして描かれており、脱北した男性は中国でどのような経験をするのかは明らかではない。しかし、男性脱北者は、奴隷並みの低賃金で農村に雇われることが多いと述べている（パク書p.163）。そして、女性については、脱北を手引きするブローカーに人身売買により値段を付けられながら、最終的な「夫」となる買い手がつくまで転売を繰り返されるとされている（パ



写真1／
本書表紙

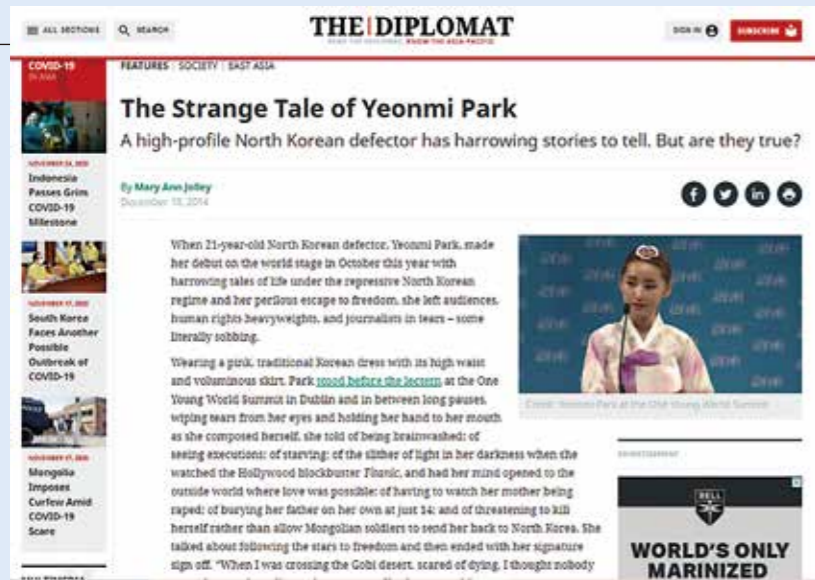


写真2 / 「The Strange Tale of Yeonmi Park—A high-profile North Korean defector has harrowing stories to tell. But are they true?」(THE DIPLOMAT ニュースサイト) (https://thediplomat.com/2014/12/the-strange-tale-of-yeonmi-park/) (2014年12月10日更新、2020年11月30日閲覧) では、パク・ヨンミの発言に疑義が呈されている。



(右) 写真3・4 / 中朝国境付近の風景



写真5～8 / 中朝国境付近の風景

ク書p.173)。中国では、計画出産(いわゆる「一人っ子政策」)により、農村では労働力確保、さらに後継ぎ確保のため女兒が誕生すると届出をせずに殺されている実態がある。これにより、中国の農村では深刻な女性不足があり、ここを穴埋めするために脱北女性が「妻」として売買の対象となっている。しかし、違法な人身売買の結果その脱北女性との間に子ができても、届出をすることはできず、その子は国籍もなければ、正規の学校にも通えず、成長してもまともな仕事につけいとされる(パク書p.164)。なお、パク書158～160頁によれば、2007年当時41歳であったパク・ヨンミの母は34歳と偽り、北朝鮮人ブローカーに500円で売られた後、中国人ブローカーに650アメリカドルで売られたらしい。そして、これらの違法行為を同じ場所で行っていた場合、警察(中国語では「公安」)に発見されやすくなるためか、脱北女性の居場所は頻繁に変わり(パク書p.189)、ブローカーはある程度警察官も買収しておくようである(パク書p.200)。このように、一部の警察官を買収しておくことによって、中朝国境地域、またこの近辺での都市である瀋陽周辺をはじめとする中国東北部では、このような人身売買が少なくとも2007年頃には盛んに行われていたと

いう(パク書p.164)。そして、パク書によれば、人身売買のブローカーは、脱北女性に対し、「北朝鮮に送還される脱北者がどんな目にあるか知らないのか?……なんなら、今夜にもおまえを送還することもできる」と北朝鮮に送還すると脅して逃亡を防止したり、性行為の強要を行っているようである(パク書p.163, p.214)。しかし、そのように脱北女性に「脅し」をかけている反面、「妻」として販売した女性が売買一年以内に逃亡して見つからなくなった場合、ブローカーは、販売した代金を返却するというを行っているし、実際に返金をしているようである(パク書p.193, p.202)。パク書p.193では、これを「一年保証」と呼んでいる。

3. パク書に描かれた中国での脱北者に対する法社会学的検討

パク書p.164では、中国でも人身売買は違法であるとしている。中国刑法(1979年7月6日公布、1980年1月1日施行。1997年3月14日全面改正、同年10月1日改正法施行。2017年11月4日最終改正・同日施行)第241条は、「(第1項)誘拐され売買された婦女または児童を買い受けた者は、3年以下の有期徒刑、拘役または管制に処す。(第2項)誘拐され売買さ

れた婦女を買い受け、性的関係を強要したときは、本法第236条の規定により罪を認定し処罰する。(第3項以下:略)」と規定し、誘拐女子児童購買罪と呼ばれている(甲斐克則=劉建利 2011 : p.146)。なお、ここでいう刑法第236条とは強姦罪の規定である。中国刑法第241条第1項により、少なくとも女性の人身売買については犯罪となる。もともと、直接的には人身売買の規定ではないものの、中国刑法第238条第1項は、「不法に人を監禁すること、またはその他の方法により人の人身の自由を剥奪した者は、3年以下の有期徒刑、拘役、管制または政治的権利の剥奪に処す。殴打または侮辱の情状があるときは、重く処罰する」と規定している(甲斐克則=劉建利 2011 : p.144)。中国刑法第238条第1項は、被害者の行動の自由を奪うことを犯罪としているため(賈宇 2009 : pp.373～374)、第241条で犯罪とできない人身売買を処罰する根拠となる。脱北者を売買するブローカーは、脱北女性を北朝鮮に送還されたくないだろうと脅迫しているが、警察などに通報したらブローカーも逮捕されるため、事実上は脱北者を警察に通報することはできないであろう。ブローカーは、警察を買収しているようであるが、当該脱北者が収監された警察署や

入国管理局でブローカーのことを話せば、買収されていない当局官憲はブローカーを逮捕するであろう。しかし、脱北者は万が一にも北朝鮮に送還されることだけは避けたいか、このような知識がないため、ブローカーに従うようになるものと思われる。以上より、脱北者がブローカーに「脅迫され、それに従う」ということは、北朝鮮に万が一にも送還されるかもしれないという恐怖か実はブローカーも逮捕されるということを知らないという無知によって成立していると考えられる。ブローカーについては、そのような脱北者の恐怖か無知に乗じて強気に出ているのであるが、脱北者の売買について「一年保証」をするなど、脱北者の「買主」に対しては誠実な売主の責任を果たしている。これは、脱北者の「買主」が、「購入」した脱北者に満足せずに、買収していない警察官に通報されることを警戒しているであろう。脱北者に逃亡された以上、匿名通報の形式で警察に通報すれば、脱北者の「購入者」は、自らが逮捕される可能性を下げつつ、「不良品」を「販売」したブローカーに「報復」できるからである。脱北者の「購入者」は、割と警察を恐れているのである(パク書p.208)。

4. おわりに

脱北者を人身売買するブローカーは、脱北者を住まわせる場所を頻繁に変えたり、一部の警察官を買収するなどしながら脱北者の「売買」を行っている。しかし、中国のようにあらゆる通信手段なども政府の管理下にある国家において、中国当局がこのような人身売買に気づいていないとは考えにくい。中国東北部では、このような人身売買によって中国人(脱北者の、ではない!)の社会や経済が動いている側面があり、黙認されているということなのであろう(本書p.161)。こうして中国当局は、このような人身売買には積極的に介入することはないが、ブローカーは脱北者の「購入者」が警察などに通報をしないように「商品」に対する売主の責任を果たすべく、脱北者の「売買代金」などにつき「一年保証」をするというメカニズムが働くのではないだろうか。中朝国境付近では、このような法社会が形成されてい

ると考えられる。なお、本稿の最後にあえて繰り返しておくが、本稿はあくまで「パク書に描かれた」脱北者の経験を素材にした考察である。

<参考文献>
 甲斐克則=劉建利(編訳)(2011)『中華人民共和国刑法』成文堂。
 高橋孝治(2019)『中国社会の法社会学——「無秩序」の奥にある法則の探求』明石書店。
 パク・ヨンミ(満園真木(訳))(2015)『生きるための選択——少女は13歳のとき、脱北することを決意して川を渡った』辰巳出版。
 和田仁孝=太田勝造[ほか](編)(2004)『法と社会へのアプローチ』日本評論社。
 賈宇(主編)(2009)『刑法学』中国・中国政法大学出版社。
 강효백(姜孝白)(2009)「사실혼 관계의 재중탈북여성 및 그 자녀의 법적 지위에 관한 중국법제(事実婚姻関係の在中脱北女性およびその子の法的地位に関する中国法制)」『慶熙法學』(44巻3号)慶熙大学校法学研究所, pp.125～152頁収録。

なお、本稿の中朝国境付近の写真については、中朝関係論・北朝鮮経済を専門とする匿名希望の方から提供を受けた。この場を借りて貴重な写真を提供くださった方に御礼申し上げたい。

高橋孝治(たかはし こうじ)

一般企業勤務・立教大学アジア地域研究所特任研究員
 日本で修士課程修了後、中国政法大学刑事司法学院博士課程修了(法学博士)。専門は比較法(中国法、台湾法)、中国社会を素材にした法社会学。少子化で大学教員の需要も減っているにもかかわらず「研究者は大学に勤めなければ」という研究界の空気感に違和感を持ち、「大学に勤めなくても研究はできる」を体現しようと一般企業勤務。会員の傍ら韓国・檀国大学校 日本研究所 海外研究諮問委員も兼務。著書に『ビジネスマンのための中国労働法』(労働調査会、2015)、『中国社会の法社会学』(明石書店、2019)。日本、中国、台湾、香港、韓国で発表した論文・論考は100本を超える。

上海はなぜ開港されたのか

上田 信

アヘン戦争後の1842年に結ばれた南京条約で、広州・廈門・寧波・福州とともに、上海が開港地に指定されたことは、よく知られたことである。その後の上海の発展は周知のことなので、「なぜ」と問われることはほとんどない。上海以外の四港は、いずれも一六世紀にはヨーロッパ人にもよく知られていた。一方、上海については多くの概説書に、開港以前は一地方都市に過ぎなかった、と記されることが多い。外洋を航海するヨーロッパの船舶が、長江をさかのぼり、さらに支流の黄浦江に入って、上海にいたることはなかった。それにもかかわらず、南京条約で上海が指定されているのである。その背景に何があったのだろうか。

アジア地域研究所を申請機関として2017年から進めている科研プロジェクト「渡海者のアイデンティティと領域国家」では、渡海者に関する初版本などの希少本の購入を行った。その中の一冊『ロード・アマースト号中国北部諸港航海報告書』¹は、上海が開港地に選ばれた契機を伝えてくれる。1832年に中国から朝鮮の沿岸を探索を目的に航海したロード・アマースト号は、東インド会社所有の船で、日本語訳聖書を作成したことも知られている宣教師カール＝ギュツラフ²が乗船していた。

ギュツラフは上海について、次のように記している。

ヨーロッパの船舶が、これまでこの地で交易を行ったことはないようである。おそらく揚子江の河口の広大な砂州が、上海に続く河川に船を進めることを躊躇させたからだと思われる。もし砂州の全体を正確に調べれば、沖まで遠く続く浅瀬は、普通に水深を調査しただけで、危険はほとんどないと判つただろう。ヨーロッパ人がこれまで進出していないアジアの中枢部の港と接続する場所と交易することに、ブリテッシュの産業と貿易事業に新たなチャンネルを開くことを切望する開明的な政治家は関心を持っている。ただ悔しいことに、私たちはこの地で、官僚たちの了見が狭く、道理を知らないことを思い知った。

上海に関する情報は、清朝との開戦を決断したイギリス政府の要人にどのように伝わったのであろうか。もちろん上海に寄港したロード・アマースト号は東インド会社の持ち船であり、会社の関係者からロンドンに報告されたとするのが妥当かも知れない。しかし、ギュツラフからアヘン商人ウィリアム＝ジャーディンを経由して、外相パーマストン子爵(本名ヘンリー＝ジョン・テンブル)に、上海の貿易港としての魅力が伝わった可能性もある。ジャーディンは、いまも香港を中心に活動しているジャーディン・マセソン商会の共同創業者である。

ギュツラフは1826年にオランダ伝道協会からバタヴィアに派遣され、1831年から中国での伝導に着手していた。ちょうどそのころ、ジャーディンは広州以外の土地に、商圈を拡げるようとしていた。1832年10月にジャーディン・マセソン商会に属する交易船シルフ号は、広東沖から北上したことを皮切りとして、福建から遼東にいたる海域に進出し盛んにアヘンを密輸した。シルフ号が開拓したネットワークに沿って商会の交易船が、中国沿海地域に乗り出す。この



写真3 開港された上海(1985年筆者撮影)

商船に同乗し、通訳に当たったのがギュツラフであった。

ギュツラフが1833年に商船ジョンビガー号の船上から広州のジャーディンに宛てた手紙には、沿海各地の市場動向について次のように記している。

すがすがしい強風に乗って、私たちは今回の最初の目的地である南澳(Namoa)(汕頭の洋上に浮かぶ島で、後期倭寇の拠点ともなっていた一引用者)を通過しました。……この地で、私たちはすぐに、前年シルフ号で航海した馴染みの顧客に迎えられました。最初に販売したのは、キャラコのベールでした。……キャラコはよく売っていますが、カントンの価格を上回っていません。それでも、ブリテッシュの工業製品(manufactures)の販路を拓くことはあなたの大きな目的なので、わずかなりともベールを取引できた私たちのささやかな努力を、笑っていただければ幸いです³。

この手紙からは、ジャーディンがアヘンだけではなく、産業革命でイギリスの主要産品となった綿織物の市場を中国で開拓しようとしていたこと、ギュツラフが商会の代理人として情報収集を担っていたことを、うかがい知ることができる。ジャーディンはその功績に応じるためか、ギュツラフが著した中国通史をニューヨークで出版する際に、資金を提供している。業務に忙殺されるジャーディンは、ギュツラフから中国について多くを学んでいたと思われる。

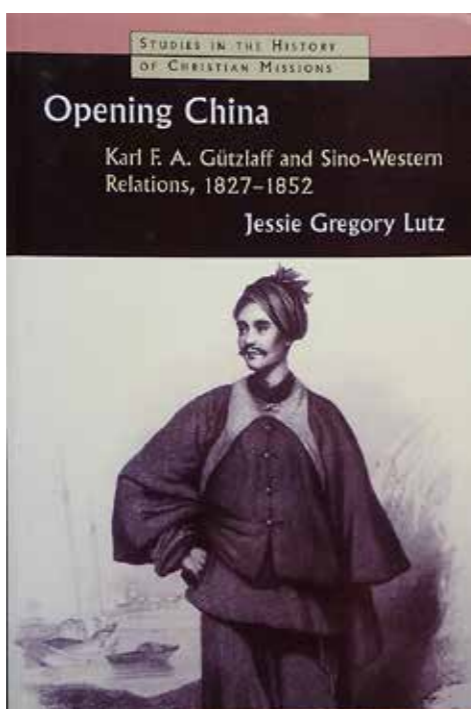
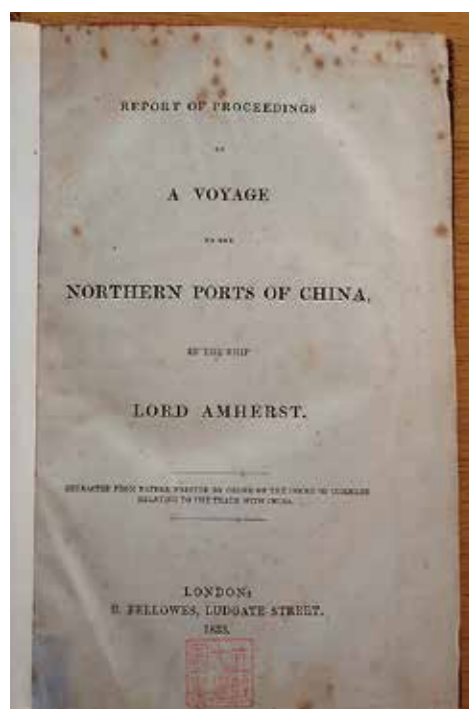
1839年、欽差大臣の林則徐が外国商人から没収したアヘンを焼却したとき、ジャーディンはイギリス本国への帰路の途上にあった。アヘン没収の知らせを受けると、日程を繰り上げてロ

ンドンに急行し、知人のつてを使って外相パーマストンと接点を持つ。ジャーディンは、アヘン没収を口実として戦端を開いたあと、イギリスが採るべき戦略、戦勝したときに清朝と結ぶ条約に盛り込むべき条項などを検討し、ジャーディン・ペーパーと呼ばれる提案としてまとめ、外相に届けている。そこには、次のように記されていたと推測されている。

艦隊を北京の近くまで航行させ、清朝皇帝に[清朝がイギリスに与えた]侮辱について謝罪するように直接に迫り、破棄させたアヘンの代金を支払わせ、公平な通商条約を結ばせ、[広東よりも]北方の諸港、すなわち廈門・福州・寧波・上海、もし可能であれば潮州を、自由に交易できるように開港させるべきです⁴。

アヘン戦争から南京条約締結までの過程をみると、ジャーディンの提言がほぼそのまま活かされている。上海に着目するジャーディンの提言を受け、ロンドンの「開明的な政治家」は、この『航海報告書』を読み返したのではないだろうか。いまその初版本を手にして、私はそのように想像をたくましくしている。

1) Lindsay / Gutzlaff, *Report of Proceedings on a Voyage to the Northern Ports of China, in the Ship Lord Amherst* [London], 1833, p.287.
2) Lutz, Jessie Gregory, *Opening China: Karl F. A. Gutzlaff and Sino-Western Relations, 1827-1852*, William B. Eerdmans Publishing Company, 2008.
3) Le Pichon, Alain, *China Trade and Empire: Jardine, Matheson & Co. and the Origins of British Rule in Hong Kong 1827-1843*, Oxford University Press, 2006, p.197.
4) Le Pichon, Alain, *Ibid.*, p.43.



(左)写真1/
『ロード・アマースト号中国北部諸港航海報告書』
初版本の表紙
(右)写真2/
ギュツラフの肖像
(Lutz, Jessie Gregory, *Opening China*の表紙)

Profile

上田 信(うへだ・まこと) / 立教大学文学部教授
東京大学大学院人文科学研究科(東洋史学専攻修士課程)修了。東京大学東洋文化研究所助手を経て立教大学文学部。現在は同教授。専門は中国社会学・生態環境史。

コロナとフィールドワーク ことはじめ

橋本 栄莉

立教大学文学部准教授

1. 私の身体は誰のもの？

立教大学で働き始めて約2年。実は、私はまだ一度も立教大学の「教壇」に立つことがないんです。1年目、いきなりの出産と産休。2年目、新型コロナウイルス（以下、コロナ）の影響でオンライン講義。公私ともに、思い通りにならない我が身体に支配された2年間でした。

私の専門である文化人類学は、世界の様々な事象から、「人類（=私）とは何か？」について考える学問です。そのために重要なのは、自分にとって他者であるような人々のなかに潜り込んで、五感や身体でものを考えるフィールドワークです。コロナのために、突如として私たちの身体や世界は得体のしれない他者に支配されるものになってしまいました。いや、これまでそうだったのかもしれませんが、そういうことに気づかせてくれたのが今回の災禍でした。いきなり他者になってしまった私たち。…こうして「他者としての私たち」をゼミ生と一緒に探る試みは始まりました。

2. 人類にとってマスクとは何か

そもそも私たちの身体とは一体何で、誰のものなのでしょう？この問いについて考えるために、2年生の演習では浮ヶ谷幸代著『身体と境界の人類学』（2010年、春風社）をテキストとし、人類が自分たちの

身体をどのように扱い、操作・統治しようとしてきたのかを人類学の理論と現在の事象を重ね合わせながら考えました。

中でも盛り上がったのはマスクをめぐる議論でした。当時、マスク不足や「マスク警察」、マスク着用拒否のデモなどが日々報道されていました。マスク(mask)は「仮面」とも訳されます。顔の全てまたは一部を覆うことに、人類はこれまでいかなる意味を見出してきたのでしょうか？マスクは、接触しているという点で身体の内側でもあり、外側でもあるような境界的な存在です。この新たな境界は、人間関係にどのような影響を及ぼすのでしょうか？また、マスクなしでも、私たちは常に「マスク的な自己／ペルソナ」を着用してはいませんか？春学期の授業が終わる頃には、私たちは「我々の身体は一度も我々のものではなかった」という極端な結論に達しようとしていました。

3. distance/distancing のフィールドワーク

いやいや、まだわかりません。後期から、私たちはコロナ禍でできるフィールドワークの手法について考え始めました。フィールドワークは、何も外に出歩いて人と話すばかりではありません。部屋で孤独に、自己とは世界とはと考える作業もフィールドワークの一環です。スマホを開けば、そこには無限の「世界」が広がっています。ゼ

ミではグループに分かれて、「マスクと境界」や「コロナと宗教」、「オンライン〇〇」などのテーマに沿って、「コロナ時代の私たちの民族誌」を作成することにしました。感染対策をしつつ、遠巻きのイベント観察、日常風景の変容の把握、SNSの履歴分析、家族との対話分析、オンライン巡検…など試行錯誤の中で、ゼミ生はそれぞれの「フィールドワーク」を行っています。どんなものが出てくるのか、私も楽しみ半分・不安半分ですが、少なくとも、「他者としての私たち」を捉えようとする試みは、今後この社会を生き抜くヒントになるはずで

私アフリカ・南スーダンでのフィールドワークから学んできたものの一つに、転んでもただでは起きぬ精神がありました。また、思い通りにならない人生を、思考や実践を通していかに充実させるかということも、現地の人々に教えてもらいました。人類が不自由な身体とどのように向き合っているのか、この歴史的一幕を、自分の身体を通じて考えること。現在進行形の災禍において、様々な現象を遠巻きに眺めて面白がる、というのは不謹慎だと思われるかもしれませんが、私には、その営みの中に、新たな身体と、分断の進む世界を捉えるための知が眠っているように思えないのです。



写真1/英ピットリヴァース博物館に展示されている日本の伝統的な「マスク」。(撮影:筆者)



写真2/宗教研のゼミ生が訪れた新宿区の葛谷御霊神社。コロナ禍でも毎日訪れる人もいます。(撮影:山下瑠子)

中国語「で」 中国文化を学ぶ・考える

王 媛

立教大学
異文化コミュニケーション学部助教

今年で変わったこと、変わらないこと

この原稿を執筆している現在、2019年4月に私が立教大学に入職してから2度目のクリスマスを迎えようとしています。振り返れば、2020年はコロナウイルスに脅かされる平穏でない日々が続き、大学の授業もこれまでに経験したことがないオンラインという形で行われてきました。大学の「新たな日常」が生まれようとするなかで、一教員として、これまでと比べて「変わったこと」、そして「変わらないこと」を実感しています。

「変わったこと」は学習指導の形です。これまで対面で行っていた教育・研究指導がオンライン方式に変わるなかで、当初はその先行きを懸念していました。しかし、私が双方向のリアルタイム参加型で取り組んだ「コミュニケーション・セミナー」や「中国語 Lecture」などの科目では、学生がメールなどインターネットツールを利用して提出した課題を添削したり、リアクションペーパーに答えたり、zoomで学生と向かい合って質問に答え、相談に応じたりすることなどを通じて、むしろ従来と比べて、より個別に対応することができたと感じています。学生の授業に対する満足度が上がったという声を聞きます。これは予想外の成果とも言えましょう。

「変わらないこと」は学びの姿勢です。これらの科目は、語学が堪能な学生を生み出すことだけでなく、課題発見能力や論理的思考力を鍛え、広い教養を身につけたグローバル人材を育てる「場」となることを一貫した目標としています。この一年で、さまざまな工夫をこらしながら、この姿勢を崩さずに学習が実現できたのは、立教大学のすべての学生と教職員のあいだに培われてきた「学びの精神」を大切にしている伝統が背景にあるからです。2020年はおそらくパンデミックの年として歴史に刻まれることになると思いますが、こうして探求の足取りを緩めず、知を受け継ぐための信念と努力が色褪せずに継承されていくことを願っています。

授業の内容と構成

現在私は、外国語科目としての中国語と、学びのツールとして中国語を用いる「中国語 Lecture」という科目を担当しています。前者は中国語の言語能力を身につけること、後者は中国語圏の歴史と文化および日中文化交流などのテーマについて中国語で理解を深めることを目的としています。ここでは、後者の内容について少し紹介します。

「中国語 Lecture」の使用言語は中国語ですが、その学習目的は語学能力を上げることのみでなく、中国語の担い手が育んできた文化・歴史・社会や、その周辺地域への影響などについて理解を深めることです。これまでに取り上げたテーマとしては「漢字と文化」「飲食と文化」「宗教と信仰」「芸術と文化」などが挙げられます。「漢字と文化」では、漢字の成り立ちや漢字文化圏それぞれの地域における漢字の受容と展開を概観しました。「飲食と文化」では、「民は食をもって天をなす」中国において、食材や調味料に焦点を当てた食文化の歴史をみてきました。羊を重んじた古代中国のことや、味のうまみにも魚醤文化圏と醤油が代表する穀醤文化圏があることや、現在では中国料理として馴染みやすくなった麻婆豆腐も唐宋時代には存在しなかったことなどは、学生の知的好奇心をくすぐる内容だったようです。「宗教と信仰」では、仏教・道教の形成や宗教思想を解説するとともに、人々の日常生活のなかで多様な信仰が融合して形成された民間信仰について、信仰の対象や人々の活動について絵画資料

や画像を通して考察しました。「芸術と文化」では、絵画と音楽・舞踊・戯曲の二つの領域に焦点を当てて授業を行いました。絵画については中国の伝統的絵画であ

る「国画」の歴代の特徴を踏まえた上で、古代知識人たちが重んじていた美学を文人画から読み取ろうと試みました。音楽・舞踊・戯曲については各々の特徴を発展の道筋に沿って概観しました。特に「芸術と文化」の授業では、私の研究対象である唐代文化交流にかかわる敦煌壁画を取り上げて、そこに描かれていた仏教世界の音楽がさまざまな西域音楽を吸収した現実世界の唐代宮廷音楽においても用いられていたありさまを反映していたことに注目し、現代世界で盛んに推進される異文化交流が、実は音楽の世界ですでに千年以上前に行われていたことを示し、多くの学生が関心をもってくれました。

明日に向けて

授業では時間は限られていて、いくつかの切り口からしか中国語圏の文化を概観することができませんでした。しかし、その中で、非母語話者と母語話者が自由に意見・議論を交わすことによって、学生それぞれが学びの過程で発見した問題に対してそれまでとは異なる視点から考えることができました。かつて古代中国でも盛んに行われてきたように、言語の壁を越えて、柔軟な姿勢と包容力をもって異なる文化背景を持つ人々を理解することが、現代の私たちに求められている能力だと、これらの授業の担当を通じて痛感しています。授業を重ねるにつれて学生も教員もお互いに成長していく「学びの精神」の初心を忘れることなく、これからも邁進していきたいと思っています。是以為銘。



写真1/林西莉『漢字王国』人民美術出版社2015, p.62



写真2/莫高窟386窟壁画 出典:王克芬編『敦煌石窟全集17』商務印書館2001, p.101

評／倉田 徹(立教大学法学部教授・アジア地域研究所副所長)

21 人口の中国史 —先史時代から19世紀まで—

著者／上田信

発行／岩波書店(2020)

価格／902円(税込)



2020年、これほど文明と技術が進歩した時代にあっても、世界は新型コロナウイルス肺炎の流行によって、国際政治・経済・社会のあり方が、人間という生物の力の限界によって影響され、左右されることを改めて思い知らされた。そして、世界の歴史が無機質なシステムや、生物学的限界とは無関係の思想・思考によってのみで、即ち人工物のメカニズムだけで動くものでは決してなく、自然界からのインプットによって大いにかき乱されるという、よく考えれば当たり前の事実を再確認することを強いられた。評者が研究対象としている香港の現代政治においても、2019年のあれほど激しい抗議活動が、まさか感染症という要因によって「鎮静化」を余儀なくされるとは、とても想像がつかなかった。

そういった意味で、人口の増減という「生物学的」要素も、歴史の動向の説明において間違いなく極めて重要である。本書で展開されているのは、自然環境と歴史の関係性をこれまでに様々な角度から論じてきた筆者による、人口という切り口から見た中国の通史という壮大な議論である。

本書がカバーする中国の人口史は、新石器時代からの考古学的推計から19世紀までと長い。問題意識はさらにそれを超えて現代、そして未来までつながっているようだ。筆者はその長い中国史を、生態環境と王朝史を統合した「合」「散」「離」「集」のサイクルで説明することを提唱する。即ち、安定した文明「合」の時代から、求心力を失う「散」の時代、新しい文明の追求と競争の「離」の時代、勝者が再度統合する「集」の時代という展開である。

人口という要素を盛り込んだ中国史の

全体像の議論として筆者が連想するのは、香港中文大学の金観濤・劉青峰による『興盛與危機』(邦訳は若林正丈・村田雄二郎訳『中国社会の超安定システム—「大一統」のメカニズム』、研文出版、1987年)である。同書は、戦国末期から清末までの2000年を超える期間、中国に封建王朝の時代が続いた理由を、農民経済・官僚機構・儒教イデオロギーという3つのシステムの連動によって説明し、王朝は成立から数百年で経済と官僚制の制度疲労から激しい反乱を招いて崩壊するが、儒教思想によって再度同様の絶対王政の体制を備えた王朝が築かれるというサイクルを繰り返す「超安定システム」が、中国には成立していたと論じる。

本書も人口とサイクルの議論であるが、経済・政治・思想のマクロの動向を、ミクロな分析から論じている点が興味深い。本書のクライマックスは18世紀以降の中国の人口爆発の分析である。18世紀に安定した清朝による「集」の段階に至ると、千数百年にわたって最高1億人程度に留まっていた中国の人口は爆発的増加に入る。その理由として、定説では税制改革による人口統計の正確化、そして新大陸からのジャガイモ等の伝来による食糧事情の改善が挙げられるが、筆者はそれでは不十分として、女兒を間引く「溺女」の習慣が18世紀に減少したこと、貨幣経済の浸透により食物の購入が可能になったことを推測する。その議論を族譜の分析から導く論理展開は大変ダイナミックである。

人口という要素は、中国史の重要な要因であったと同時に、中国の将来を見通す上でも、至極重要な要素であろう。コロナ

禍で世界が大打撃を受ける中、その震源地となった中国はいち早く感染の抑制と経済の回復に成功したとして、「一人勝ち」とも言われる我が世の春を謳歌している。しかし、筆者もはしがきで指摘しているように、現代中国の人口構造を見るに、「一人っ子政策」が残した極端な人口ピラミッドは、今後確実に激しい高齢化社会を生み出す。すでに労働人口比率は低下を開始しており、労働人口が経済成長に有利な構造へと転換してゆく人口ボーナスから、不利になる人口オーナスの時代へと中国は転じているとの議論もある。かりにそうであるならば、1978年の改革・開放の開始以来(筆者は中国がここから最新の「合」の時代に入ったと仮に定めている)、過去40年超にわたって持続してきた中国経済の高度成長は、今後いつまで続くのだろうか。香港で起きていることもまた「散」の予兆であろうか。他方、広大な後進地域に膨大な人口を抱える中国では、まだまだ人口の移動によって発展を継続する余地があるとの議論もある。習近平政権が近年打ち出した、内需を重視する「国内大循環経済」を実現することができるか否かは、その成否にかかっているかもしれない。

中国経済の状況は確実に共産党政権の将来を左右すると考えられるだけに、そして、中国共産党政権の将来は確実に私たちの時代のアジアや世界の運命を左右するであろうゆえに、本書は歴史学としてのみならず、これからの中国、東アジア、さらには世界を知るための必読書と言いうであろう。

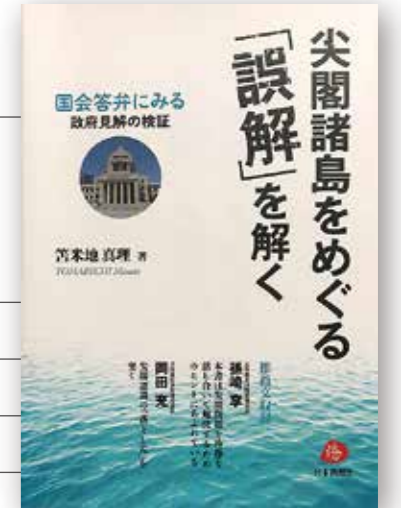
評／フランツィスカ・シュルツ(立教大学アジア地域研究所研究員)

22 尖閣諸島をめぐる「誤解」を解く 国会答弁にみる 政府見解の検証

著者／苫米地真理

発行／日本僑報社(2016)

価格／3,600円(税別)



2020年6月、日本、中国、台湾が領有権を主張している尖閣・魚釣島の周辺で中国の船が確認された日数は100日連続だった。2012年9月以降、最長の連続日数を更新している。領土問題は複雑かつ長く続いている紛争点である。

本書は、日本政府による尖閣・魚釣島の基本見解を、1950年代から1972年までの国会答弁を分析し論じている。著者の法政大学での修士論文に基づいて執筆された。

著者は、一般的には日本政府が島を1895年に編入して以来、100年以上一貫して、主張に変遷はなかったという見方が多いということには強い意識を持つ。

しかし、国会答弁を細かく検証することで、その主張が1972年5月に外務省情報文化局が発行したパンフレットで完成されたことを明らかにする。

本書は、序章と、全5章で構成されている。序章には、外務省のホームページに掲載されている主張と、紛争の対象となる全ての島のそれぞれの基本情報、地理的位置と、日本、中国、台湾が使っている名称と歴史上使用されてきた名称のリストがある。

第1章は、1950年代から1970年代までの国会答弁の分析、政府会見の変遷について述べている。第2章は、先占の法理と1970年代の紛争の「棚上げ」についてまとめている。

第3章では、「固有の領土」の概念の問題と、沖縄を巡る歴史的経緯が論じられ、それにつづく第4章では、現況維持のため、新たな「棚上げ」と、海上事故防止協定の締結、資源の共同開発が提案されている。終章では、アメリカの国際覇権の低下と、中国の台頭する世界において、どのように日中が向き合えるかということが検証されている。

全体を通して、中国と台湾が領有権を主

張し始めたのは、石油があるとの推測が公になってからであるという定説に対して、国会答弁の分析に基づいて日本の外務省の主張が1972年に完成されたことを明らかにする。さらに、1970年代の領土紛争における日中棚上げの経緯、「固有の領土」という定説の問題について、国会答弁の解釈と法律的な観点から検討している。

まずは、第1章において、1950年代の国会答弁では、日本政府が島の名称を認識していないことについて検討されている。1954年と1955年の国会答弁で記録されている発言には、「魚釣島」と「漁釣島」という名称が両方記載されている。

例えば、1954年2月の参議院水産委員会において水産庁の漁政部長への島の名称についての問い合わせがあった。漁政部長の回答は、「はっきりわかりませんが、想像いたしますので、漁釣島だろうと思います」とのことだった。

1967年以降は、日本政府の沖縄返還についての討論が始まり、「尖閣群島」、「尖閣列島」という名称が国会答弁に記載されている。

それにも関わらず、領有権の主張はまだなかった。同年6月の参議院議員団士の沖縄問題についての討論では、従来から台湾人が住みついているかどうか、その島を占領しているかという質問が出ている。総理府総務長官の回答は「何ら報告を受けておりません」ということだった。

次に、第2章では、1970年の最初の口頭での領有権主張の発言と、1972年の主張の変遷について語られる。

1972年4月と9月に、島の帰属と領有権について、総理府総務長官と、外務省条約局の参事官が明示的に答弁した。島は石垣島に属する島であり、日本の領土だということだった。

同年3月8日に日本の領有権を明示している外務省統一見解が発表された。しかし、「先占」という言葉はまだ使われていない。同年3月21日にはじめて、先占の法理によって尖閣・魚釣島が合法的に取得されたという説明を含む領有権主張が答弁された。

外務省が同年5月に発行したパンフレットでは、はじめて文書でその主張について言及された。著者によると、国会答弁の変遷を観察することによって、1895年の閣議決定で示された国際法上の先占の法理に基づく尖閣領有に関する日本政府の「物語」が完成したのは、1972年であることが明確になるという。

さらに、領土問題の「棚上げ」についても検討され、1975年以降の「棚上げ否定」の国会答弁は様々であると論じている。これについて筆者は、日中平和条約に調印する際に領土問題に触れないことで一致した暗黙の了解を示している国会答弁と外務省関係者からの証言を用いて論証している。

次に、「固有の領土」の概念が第3章で検討される。その表現は、古代史においてもともと先住民がいた地域という文脈で使用されている言葉であり、20世紀に国家が支配しはじめた領土の場合は、一般的には使用されていないとのことだ。著者は、議論を不可能にする言葉で、紛争解決が目的であれば、「固有の領土」論をやめた方が良いということを主張している。

著者は、日本の領有権の主張にとって不利になったとしても、国会答弁の内容は否定できないという。また、事実を認識し、冷静に議論することを通じて、日本と中国の信頼関係を再築する重要性について論じている。

本書が、尖閣・魚釣島についての紛争に関心を持っている多くの人の手に取まることを祈りたい。

台湾における日本認識

● 深串 徹

ふかくし・とおる

愛知大学国際中国学研究センター研究員。青山学院大学大学院国際政治経済学研究所博士後期課程修了。博士（国際政治学）。2018年9月より立教大学アジア地域研究所特任研究員。



筆者近影(台湾淡江大学にて)

台湾の「日本語世代」

2020年7月に亡くなった台湾の李登輝元総統は、日本で最も著名な外国人政治家の一人であろう。流暢な日本語を話し、日本の歴史や文化に深い造詣のあった李登輝は、しばしば「親日家」としてメディアで紹介されて来た。甲間団を率いて訪台した森喜朗元総理は、李登輝について「日本人が知らなかったことをよく知っておられる方」と述べ、「日本人は敗戦の中で自虐的になり、自分たちの国の責任に思いを強くしたことから、自国に自信を持っていなかった。そのような中、李登輝総統は、日本は勇気をもって誇りをもつべきと強くおっしゃっており、国際貢献に努力するよう教養を受けたと回想している(森喜朗元総理による会見：公益財団法人日本台湾交流協会2020年8月9日)。

李登輝は、植民地統治期の台湾で日本式教育を受けた、いわゆる「日本語世代」の台湾人である。この世代の人々の中には、日本語を話すことを好み、日本を基準にして中国や戦後台湾の状況を批判する人々が少なくない。そうした人々にとって、日本経由で獲得した知識と教養は、戦後台湾を接収した国民党政権に代表される、中国的なるものに対抗するための拠り所だったのである。

「日本語世代=台湾人すべて」と理解することの問題点

「日本語世代」の台湾人の存在は、日本でも比較的良好に知られている。また、台湾の

自由化にともない文化的産品の輸入に関する規制が緩和されると、1990年代以降若い世代を中心に、日本の大衆文化を熱烈に愛好する「哈日(ハーリー)」と呼ばれる現象が登場したことも紹介されて来た。しかし、90年代以降の状況を根拠にして、「日本語世代」の心情がそのまま戦後台湾の人々の間で普遍的に存在していたように理解することは、適切ではない。第一に、「日本語世代」より下の世代で、戦後教育を受けた人々の日本認識は、上の世代とはかなり違っていたものと考えられる。1994年公開の台湾映画「多桑」(多桑は日本語の「父さん」の当て字)の中では、日本に深い愛着を示す「日本語世代」の男性が、自分の娘から漢奸と非難されるシーンがある。「日本語世代」と、先述した「哈日」の若者たちとの間に位置する世代の人々がどのように日本を認識していたかについては、改めて検討する必要がある。

第二に、「日本語世代」の中でも、地域や社会的階層、性別などによって日本認識には差があったことが予想される。優れた日本語能力を持ち、日本的教養を有していたことで知られる人物は、李登輝を含め比較的裕福な家庭で育った漢族系の男性である場合が多い。彼らの日本認識をその世代共通の傾向と判断することには、慎重であらねばならないだろう。

第三に、「日本語世代」と同じ世代でも、1945年以降に台湾に移住した中国大陸出身の人々の日本経験は、植民地統治下にあった人々とは大きく異なる。彼らにとって、日本とは抗日戦争の相手国であり、中には身内や近い人を戦争中に亡くした人もいる。留学経験者を除けば、日本語を話すことはもちろん、日本人と日常的に接した経験もほとんどないのである。

中国大陸出身者の日本認識

以上あげた点のうち、筆者は三番目の中

国大陸出身の人々の日本認識に最も関心を抱いて来た。しかし、ある集団の集合的な認識を明らかにすることは、容易ではない。そこで、まず中国大陸出身者が中枢を占めていた権威主義体制時代の国民党政権による公式な歴史叙述において、日本がどのように描かれていたかに着目することとした。歴史叙述は書き手の日本認識を直接反映したものとは限らないが、少なくとも、どのような日本像を読み手に植え付けたいと考えていたかは読み取ることが出来る。こうして、政治指導者の言説や学校教科書、公文書などに登場する日本叙述の内容と、そうした叙述が成立するに至った過程を分析し、2019年に『戦後台湾における対日関係の公的記憶：1945-1970s』と題する著書を刊行した。

現在は、上述の研究に基づき、公式な歴史叙述を中国大陸出身の人々がどのように受容し、あるいは読み替えて来たのかを検討することで、彼らの日本認識に迫りたいと考えている。それにより、中国大陸と台湾で二つの人生を送ることになった人々にとって、日本とはどのような他者であったのかという問題を明らかにすることが、当面の目標である。

戦後台湾における対日関係の公的記憶

1945-1970s



深串 徹

深串徹(2019)
『戦後台湾における対日関係の公的記憶：1945-1970s』
国際書院

路傍の地蔵像と江戸城石垣 —西武池袋線椎名町駅前の地蔵像から考える

● 清水邦彦

しみず・くにひこ

筑波大学大学院博士一貫課程日本文化研究学際カリキュラム単位取得退学。博士(歴史民俗資料学・神奈川大学)。著書に『中世曹洞宗における地蔵信仰の受容』(2016年、岩田書院)、『日本地蔵信仰史』(2021年予定、法蔵館)。主要論文に「死者を「ホトケ」と呼ぶことについて」(『日本宗教文化史研究』23巻1号、2019年)、「地蔵像撤去・破壊から見た廃仏毀釈」(『宗教研究』92巻2号、2018年)。

私の研究対象は日本地蔵信仰史です。研究分野は、もともとは仏教学だったのですが、地蔵信仰は經典と関係なく発展・伝播しておりますので、日本民俗学の一分野である仏教民俗学に鞍替えしました。「經典と関係なく」の具体例を挙げます。東京都豊島区巢鴨に現世利益で有名なとげぬき地蔵があります。毎月の4・14・24日は地蔵の縁日とされ、関東中からお年寄りの女性が押し寄せ、参詣道である巢鴨地蔵通りは「おばあちゃん原宿」と云われています。

では縁日とは何でしょうか？ 国語辞典を引くと、「この日に参詣すると特別な利益があるとされる」と出ていますが、經典にそんなことは書いていません。では縁日はどこから生じたのでしょうか？ これを考えるのが仏教民俗学です。ちなみに地蔵の縁日は本来24日ですが、24日と地蔵とを結びつける言説は、中国宋代の説話集『地蔵菩薩応驗記』にあります。ただし、『地蔵菩薩応驗記』に縁日という言葉はありません。

私の研究を以下紹介します。私はかつて、現・東京23区域(=江戸近郊の農村)の路傍の地蔵像の悉皆調査を行いました。江戸時代以前に造立されたという伝承を有するものもありましたが、銘文で確認できる、最も古いものは、1655年造立の倉田地蔵(現・品川区大井)です(写真1)。これ以降、現・東京23区域の各地で路傍に地蔵像が造立されるようになります。江戸時代に造立されたものとして255体を確認しました。京都では路傍の地蔵像が約1万体制とされています。京都の路傍の地蔵像(石造)の多くは掘りが浅く、どこから出土した仏像を転用したと考えられるに対し、現・東京23区域の路傍の地蔵像はしっかりと掘られたものです。現・東京23区域の路傍の地蔵像は当地に住む農民たちによってあえて造立されたものと考えられます。

問題となるのは、現・東京23区域の路傍の地蔵像は原則、石造であり、多くは安山

岩を素材としていることです(目視による判断・破壊検査をする訳にはいかないの、)。安山岩は火成岩の一種です。石材としては硬い部類です。色は灰色で表面がぶつぶつなのが特徴です。安山岩は現・東京23区域から産出されません。現・東京23区域の農民たちは経済的余裕があったと云われていますが、それにしても、他地域から安山岩を購入し、輸送するほど経済的余裕があったとは考えにくい。また、安山岩を地蔵像とするには高度な技術が必要であり、地蔵像は農民たちの手作りとは思えません。農民たちは技術者に報酬を払う形で地蔵像造立を依頼したと思われ。

安山岩は何ゆえ現・東京23区域の路傍の地蔵像の素材となったのか？ その答えとなりそうなのが、豊島区長崎(椎名町駅前)にある道標地蔵(写真2)に伝わる伝承です。説明板に記す伝承によると道標地蔵は江戸城石垣の余り石を素材として造立されます。確かに江戸城石垣は安山岩を素材としています。石垣に使う安山岩は伊豆半島より大石の形で船で輸送されてきました。ということは大石を江戸において石垣構築に合わせた形に切るわけです。であれば、江戸には安山岩の余り石が大量に存したと

想定されます。そして大石を切るために、江戸に石工が集められたと考えられます。現・東京23区域の路傍の地蔵像の初出年代は1655年です。即ち、おおよそ村が確定した時期であると同時に江戸城造営が一段落した時期です。村の農民たちは、現世利益・後生善処を願い地蔵像造立を求めた(需要があった)、一方、石工たちは石垣構築の仕事が少なくなったため、安山岩が余っていたこともあり、仏像を掘ることに仕事をシフトした(供給があった)=需要と供給とが一致する形で、路傍に地蔵像が造立されるようになったと考えられます。そして供給側において人と素材に余裕があったため、需要側の経済状況と合致したと考えられます。

この説の主要論拠が道標地蔵に伝わる伝承です。ただし、この伝承に信を置いて良いものか？ 仮にこの伝承に信を置かない場合、なぜ現・東京23区域で安山岩を素材とする地蔵像が造立されたのか、説明が付きません。そう考えると、伝承を主要論拠とするとは、上記説は無下には否定できない訳です。他地域の伝承、文献や絵画、考古学資料などから上記説を補強する試みを今後も続けたいと思います。



写真1/倉田地蔵
光背に「明暦元」と掘られているゆえ、1655年造立とされる。現在は西光寺(浄土真宗)の境内に安置されているが、かつては同寺の前を通る鎌倉街道沿いにあつたとされる。



写真2/道標地蔵
右下に説明板が写っている。現在、道標地蔵は金剛院(真言宗)の門前に安置されているが、かつては近隣の山手通り沿いにあり、道路拡張によって、現在地に移転したとされる。

デング熱流行のなかで見学した台湾の土木遺跡



写真1A / 后里発電所。台湾電力公司 OB 林炳炎氏の案内で訪れた。台湾で一番古い現役の発電所



写真1B / 后里発電所の発電機

台湾水利の近代化遺跡

筆者は台湾の水利開発と台湾社会のかかわりを研究している関係で、これまで台湾のダム貯水池、水力発電所などを見学してきた。とくに、2015-2016年の半年間、台北の中央研究院に滞在中は、台湾各地のダム・発電所を見学させてもらった。こういった場所は団体でないと見学できないことが多く、留学しているというだけではあられだけ見て回ることはできなかったはずだ。人との縁に感謝するほかない。

とりわけ、台湾電力公司 OB の林炳炎氏には南投、台中、彰化の各地の水力発電

所を何度も案内してもらった。師範大学の洪致文氏、開南大学の郭雲萍氏、東京大学院生の鈴木恵可氏らと同行したことや、台湾電力公司の前身、台湾電力株式会社の3代目社長松木幹一郎の孫にあたる方々と日月潭発電所を見学したこともあった。林炳炎氏には毎回、軽妙な小話を交えながら重厚なレクチャーをしてもらった。氏は台湾電力株式会社の社史を書かれており、その後も資料収集に余念がなく、某大学図書館でばったりお会いすることもしばしばある。そのほか、八田修一氏が企画し嘉南農田水利会と雲林農田水利会の協力



写真2 (2点とも) / 東口導水堰 (灌漑用水嘉南大しゅうの水源の一つ)



のもとに実施された「台湾の土木遺産」ツアー、名古屋市立大学やまだあつし氏と引率学生たちと行った桃園農田水利組合と石門ダム見学なども貴重な体験であった。(写真1・写真2)

見学先は、戦後に建設されたダム・発電所もあるが、日本植民地期に建設されたものも少なくない。いわば近代化遺跡でもあるのだが、これらを日本人の偉業のように必要以上に強調する向きもある。だが、台湾経済史の古典、張宗漢(1980)の最後には、日本人は日本人の思惑で台湾を工業化したが、戦後復興のために日本人が残していった基礎の上に台湾という経済単位で工業発展をする、というようなことが書かれている。台湾の歴史は複雑でその時々の政権に振り回されてきたように見えるが、ダムや発電所といった利水設備を整備・維持していく過程で、徐々に自分たちが利用しやすいように変えていく台湾の人びとのしたたかさを垣間見ることがある。筆者は研究のなか、フィールドを自分の足で歩きながら、そのしたたかさを読み取りたいと思っている。

2015年台南のデング熱流行

さて、ちょうどこの留学中、台湾の南部ではデング熱(登革熱)が流行していた。デング熱は蚊を媒介とする伝染病で、発症すると高熱など各種症状が出て非常に苦しむ。特效薬はない。日本でも東京の代々木公園でデングウィルスを保有した蚊が見つかり、ニュースになったこともあった。2015年は特に台南地域が深刻な状況にあった。台南に行くと言うと、台北の友人は不安そうな顔をしていた。台南に着くと以前と同じように和やかに迎えられ、いつもとさして変わらないかのように見えたものの、デング熱の流行はみな気にかけており、とにかく蚊に刺されないことが大事だと聞かされ、虫よけスプレーや丸いシール状の虫よけグッズをもらった。向こうではお茶やお酒を2箱ずつ贈るが、虫よけスプレーも2本もらったのでまだ1本残っている。人体への刺激が少ないものが好まれていた。(写真3)

泊まっていた農田水利会(日本の土地改良区)の宿舎が朝8時から消毒を始めたこともあった。噴射される消毒液で天井

から床までが白い霧に包まれて、向こう側が見えなくなっていったのが印象的だった。2019年末から2020年、COVID-19が猛威を振るう昨今、台湾の伝染病対策が注目を浴びている。台湾の新型コロナ対策の成功は2003年のSARSの経験が活かされているといわれているが、それは2003年に一足飛びに2020年によみがえったものではないのだろうとも思う。

ハッとさせられたのは、見学先でデング熱の流行を理由にパスポートを提示するように言われたことである。



写真3 / 台南の友人からもらった虫よけスプレー



(上) 写真4 / 台南山上水源地
(下) 写真5 / 台南山上水源地濾過室内部

写真6 / 台南山上水源地 送出ポンプ室

台南山上水源地

その見学地は台南山上水源地である。台南山上水源地は1922年に完成し、1982年まで水道水を提供していた。水道事業の意義は飲料水の提供のみならず、むしろ公衆衛生の観点から必要とされていた。その後、2002年に古跡指定される。筆者が Deng 熱流行のさなかに見学に行ったのは2015年9月5日「台湾の土木遺産ツアー」でのことである。ここは2019年に台南山上花園水道博物館としてオープンし、すっかりきれいに整備されているが、我々が見学したのは公開前の特別な時期であった。(写真4~8)

ここは山中にあり車でしかアクセスできな

い。ツアーの参加者は台湾人と日本人でバスが分かれていた。バスから降りた草むらのなか、パスポートを見せると、スポーツ番号が手書きで書き写された。それだけの作業であったが、今思えば誰かが Deng 熱を発症した場合、このパスポート番号のリストが照会され、台南山上水源地が感染源かどうか調べるために書き留められたのであろう。Deng 熱は人から人へ感染することはないが、感染した人の血を吸った蚊が別の人を刺して感染が広がる。2015年の Deng 熱流行時、感染拡大を防ぐため、感染源になりそうな場所に立ち入った人々の情報をIDで管理する体制が実施されていたのだ。

うっそうと生い茂る草むらのなか、ポンプ室や濾過室などレンガ造りの建物をいくつか見て回った。すでに一部、展示パネルが設置されているところもあったが、発電機が

取り外された後の壁面のくぼみなど、多くは廃墟と化していた。美術史を専門とする鈴木恵可氏の関心は、入り口付近にあった水道技師・濱野彌四郎の胸像の台座であった。胸像は近年復元されたものであるが、台座は古いものであり、また台座から時代性を読み取れるのだと教えられた。

蚊が多い浄水地区は見学できず、また、道外れの建物を見に行こうとすると、そこは蚊が多いから行ってはいけないといわれた。一方で、許される範囲は最大限見せてもらった。貴重な体験だったと思う。

なお、台南山上花園水道博物館は自動車がないとアクセスが難しいが、台北浄水場の自來水博物館のほうは台北市内の国立台湾大学のすぐ近くにある。1908年に建てられたこのポンプ室は、内装は簡素だが外装はバロック式という不思議な空間である。機会があればぜひ訪れてほしい。

<参考文献>
張宗漢 (1980) 『光復前台湾之工業化』聯經出版事業公司 (台北)。

清水美里 (しみず・みさと)

立教大学経済学部助教
2012年東京外国語大学大学院地域文化研究科博士課程修了。早稲田大学・東京外国語大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員PD、明治学院大学国際平和研究所研究員等を経て2019年より現職。著書に『帝国日本の「開発」と植民地台湾：台湾の嘉南大圳と日月潭発電所』(単著、有志舎、2015年)、『日本植民地研究の論点』(共著、岩波書店、2018年)他。



(左) 写真7 / 送出ポンプ室の発電機設置跡 (発電機は取り外されている)
(右) 写真8 / 台南山上水源地。蚊が多いため近づいてはいけないと言われた場所

アジ研的 ●レストラン探訪●

タイレストラン ムートーン

文・写真 / 四日市康博 (立教大学文学部史学科准教授・アジア地域研究所)



季節のランチ：この日はパッパクブーン (空心菜炒め) とガイヤーン (ハーフ)



イサーン料理：ガイヤーン (鶏香味焼き)、ソムタムバーラー (田舎風青パパイヤサラダ)、ラープムー (豚挽肉ハーブ和え)



トムセップ (激辛豚モツスープ) とカオニャオ (餅米)

立教通りにある池袋駅地下街「エチカ」への入口。が、そこには入らずに右手に少し進むと階段があって、その二階にタイ料理店「ムートーン」がある。池袋は東南アジア系エスニック料理店が多い。特に立教通りから西公園側の裏通り、通称「裏立教通り」(今私が名付けた)に一步入るとマレー、ベトナム、タイなどの料理屋が軒を連ねている。そんな激戦区においてムートーンは多くの客で賑わっている。特にランチ時は学生からおば様まで絶大な支持を得ているようだ。また、私もそうだが、なにげに一人客も多い。タイという国がバックパッカーからシニアの高級リゾートまで幅広い支持を得ているように、この店もワンコインの日替わりランチから本格的なタイ料理まで広いニーズに対応する。店長さんがタイ出身の奥さんと一緒に考えたという店名の「ムートーン」はタイ語で「黄金の豚」だそう。ごちんまりとして現地の雰囲気

漂う店内には子豚の絵が描かれたトートバッグがいくつもぶら下がっていて、スタンプカードがいっぱいになると、その子豚バッグやワインなどがもらえる。海外から研究者が来た時など、ここで研究会の続き(夜の部ともいう)をしてバッグをプレゼントすれば一石二鳥だ。

さて、そのような「ムートーン」であるが、タイのなかでもイサーンと呼ばれる東北地方の料理店であるというので店長さんに訊いてみた。「いや、特に東北料理だけというわけではないです。料理人に東北出身が多いくらいでしょうか。」え、そうなの。でもせっかく予習したので、三大イサーン料理というガイヤーン、ソムタム、ラープを注文してみた。イサーン地方は歴史的にアンコール王国やランサーン王国の領域に入り、タイのなかでも特徴的な文化を持つ地域である。その料理もさぞや特徴的であろうと思いきや、実

はイサーン料理はタイ国内でもかなり広く普及しており、いまやタイ料理店では普通に見られる。タイ料理が激辛というのも、本来はイサーン料理の地域的な特徴に過ぎなかったという。

東北料理以外にも、トムヤンクンやガバオ、タイカレーなど定番中の定番から海鮮料理や麺類まで揃っており、ガバオやタイカレーはミニサイズの追加もできる。日替わりメニューに追加するとランチとしてはほぼコスパ完璧である。お勧めはスープ系で、これにカオニャオ(餅米)やカオフォンマリ(ジャスミンライス)を合わせるとなかなか良い。タイ米の美味しさがスープを引き立てている。かつて米不足の際に日本に輸入されたタイ米はイマイチというイメージがあるが、きちんとした店で炊いたタイ米を食べると素晴らしい。是非、タイ米の美味しさも味わってみてほしい。

タイレストラン ムートーン

〒171-0021 豊島区西池袋5-1-10第3矢島ビル2F TEL03-3987-0588
池袋駅C3出口から左側すぐ、池袋駅(北口)から徒歩5分、
立教大学正門から徒歩3分
営業時間 / 11:30~15:00 (L.O.14:30)、17:00~22:30 (水曜定休日)



ウィーンから来た中世グローバル史家 ヨハネスを囲んで
タイビールをかつらう研究者たち